

タイトル：IFストーリー「コキュートス ―ジゼルの憂鬱―」  
当小説に登場する人物、団体は創作されたものであり、実在のものと完全な無関係です。  
架空の街・店・建造物です。  
小説内の事件なども完全な架空のものです。  
当作品は完全なるフィクションです。

それは全く予期しない出来事だった。  
ダンテ神曲展のため作品買い付けに訪れた西部イタリアの街「モンテ・ルチェ」で、旬果はオークションで絵画を競り落とし、その絵画が3日後滞在先の「オテル・パラディソ」に到着したその夜、拉致されたのだ。  
鮮やかに滑り込むように、睡眠薬をかがされ意識を失う前、こんな会話が聞こえてきた気がする。

——顔を見られた、まずい。彼女を殺すしかないわ。  
——待って、なかなか上玉じゃない？店で働かせれば良いわ。そうすれば逃がさずに済む……

(ころす……？なんて怖い話なの……)

頭が重い。  
さっきまでのことが夢であるようにと願い、薄く目を開けば見知らぬ部屋だ。  
やや暗い、ワインレッドの照明。壁には裸の女神の絵、彫像などの美術品が飾られ、どことなく女性的な雰囲気があった。  
それに、甘い甘い花のような、スパイシーな香りが漂っている。  
香水をつけない旬果だが、どうやら高級香水だとは分かった。安いものはトイレの芳香剤か、お菓子みたいな香りがするものだ。  
「ああ、目覚めたのね」  
やや低いが蠱惑的な響きの女性の声。  
振り返ると、眉と胸元でぱつぱりと切りそろえられた黒髪の美女がドアの前に立っていた。  
グレーに黒のストライプジャケット、黒のシャツはボタンが開けられ、白い肌と谷間が見えている。  
タイトスカートには深いスリット、そこから見えるガーターベルトと、それに止められている太腿までのストッキング。  
同性でも見るのをはばかれるようなエロティックな恰好だった。  
目覚めたばかりで、頭はまだぼんやりしているため、それくらいしか分からない。  
彼女は何者だろう？  
だが確か、意識を失う前に見た気がする……絵を盗んだ女性？  
「大丈夫よ、あなたを傷つけるつもりはないから。アウグストならやりかねないけどね」  
「え？」  
「バイク事故に見せかけて……とか」  
「！」  
つい昨日起きたことだ。植え込みからバイクが無理に飛び出し、旬果は危うく轢かれるところだった。  
「自分が置かれている状況がわかった？この街はね、クラネ・ジェーロっていうマフィアが仕切ってるの。まあ、宣伝なんてしてないから、観光客じゃわかんないでしょうね。噂くらいなら知ってるでしょう？」  
「噂くらいなら……」  
立ち上がろうとすると、強烈なめまいがした。  
眠っていたソファに再び座り込んでしまう。  
「私はそのマフィア、クラネ・ジェーロの幹部・リヴィアよ。よろしく、お嬢さん」  
「マ……そんな、待って……」  
理解が追い付かない。いきなりの話に、旬果は吐き気を感じた。  
「嘘でしょう？」  
「嘘だと思おう？ならなぜあなたを拉致するのよ。こんなこと平気で出来るの、犯罪者だけよ」  
「でも、だって……待って、私、何もしてません。あの、誤解か何かだわ。帰してくれませんか？」  
「無理よ。あなたが買った絵画、それが目的。それとここであなたを逃がせば、大変なことになるじゃない」  
「絵画ならお渡しします、警察にも言わないから……」  
「そんな簡単なことだと思う？あなたを逃がせば私が困ることになるの。私たちお互いにとって良い方法は、あなたがここで働くことね。そうじゃないと、あなた殺されちゃうわよ」

「どうして？私、何も……何もしてないじゃないですか？！」  
「そうよ、確かにその通り。でもこのままあなたを逃がせば、私がアウグストをだしぬくつもりだとばれちゃうの。そうじゃなくて、あなたがお金のためにここで働くとしたら、そうすれば何の問題もなくなるのよ。アウグストはあなたを殺さなくて済むし、私は絵画のことなんて知らぬ存ぜぬを通せるから……」  
リヴィアの言っていることは理解出来ない。  
旬果は慌てて立ち上がり、ドアへ向かった。  
リヴィアは肩をすくめてドアを開く——そこに広がっていたのは、旬果にはまるで異世界のよ  
うな空間。  
薄暗い照明の中、シャンデリアがきらきらと宝石のような光を飛ばし、ステージでは黒のラン  
ジェリーを身につけた女性たちがあられもない恰好で踊っている。  
革張りのソファに大理石のテーブル、そこに座るのはパリッとしたシャツを着た男性客だ。  
お酒と香水が香り、睡眠薬から目覚めた旬果にはいささか刺激が強すぎる。  
テーブル席ではバニーガールが客にまたがり、胸をおしつけるようにして踊っていた。  
「……！」  
こんな店に入ったこともない。ドラマや映画で見ると、何とも妖艶な「ストリップ小屋」  
……。  
「その辺の下品な店と一緒にしないでね。ここは上客しか来ない、一流の店なの。VIPルームもい  
くつかあるわ。個室では何が起きてても良いの。恋愛は自由なものね」  
「それは……それって、売春では……」  
「ああ、そうだった？私は把握してないのよ。売春？彼女たちが客と何をしようが、誰にも  
関係ないわ。チップだって、ただサービスが良ければ払われるのが当然ですものね」  
息が追いつかない。胸が浅く上下し、旬果は先ほどの部屋に逃げ込んだ。  
「あぁっ……！」  
と、淫らな声が聞こえて来て耳を塞ぐ。  
ドアが閉じられ、リヴィアのハイヒールの音が近づいてくる。  
はっとした瞬間には、赤いマニキュアの爪が旬果の顎のラインを撫でていた。  
「うふふ、可愛い子だこと。まだうぶなのね。ウサギちゃんみたい。いいわ、じっくりしつけて  
あげるから、安心して……”バニー”」

ネイサンはアウグストに呼ばれていた。  
年に1、2度行われる幹部たち・側近たちを連れての宴会だ。費用は当然ながらアウグストが  
持ち、店も彼が「上流」と呼ぶ大店ばかりである。  
ネイサンは断っていたが、今回は「静かに飲むつもりだ」と言われ、さすがに毎回断っても体  
裁が悪いと出席することにした。  
迎えの車がネイサンを降ろした店を見て、やはり来なければ良かったと思う。  
夜、大通りから一步小道を通り坂を降りた先にある異様な空気を放つそこ。  
「L'Oasi della Regina”（ローアジ・デッラ・レジーナ）」は、女王のオアシスという意味のリ  
ヴィアの店だった。  
つまりここが彼女の売春の城ということである。  
モナコや、そこに集まる各国の若い女を集め、働かせている店。  
表向きはバーレスクを気取っているが、実際は裏客はVIPルームに案内されそこで行為に及ぶ。  
隠されたメニューであるカクテル「ネクター」を注文すれば、そこに案内されるという仕組み  
だった。  
ネイサンはそこに隠しカメラと盗聴器を仕込むまでは成功していた。  
問題は、リヴィア自身もそれを仕込んでいるということだ。でなければ裏客の弱みを掴めな  
い。  
彼女はああやって裏社会で成り上がっていったのだ。  
幹部達は喜んでいて、ここにいる女性たちは整形も込みで「しつけ」られているため、総じて  
レベルが高い。  
リヴィアは元モデルだ。歩き方も見せ方も上手い。  
中で給仕として働く女性たちは皆上品で、かつ体型も整いエロティックだった。  
「今日はバニーガールか」  
と、案内された一番奥、ステージも店も見渡せる円卓席でアウグストは言った。  
彼の隣にすぐ背の高い金髪女性——カテリーナだ——がつき、彼の好きなブランドを注ぎ始  
める。  
「カポ、バニーは好きじゃない？」  
「さあ。前のスーツは良かった。賢そうじゃないか」  
「カポは賢くて、品のある子が好きなんでしょう」  
「ああ。お前みたいに」

アウグストがカテリーナの肩を抱いた。  
皆それぞれ衣装が違っていた。  
体型や髪、肌の色に合わせて最も美しく見えるものだ。  
カテリーナはピンクのバニーガール衣装。ワンピース型で、ハイレグが彼女の脚をさらに長く  
見せている。網タイツがやけに生々しい感じだ。

「好きにしていぞ」  
アウグストはそう言った。今夜、仕事の話は一切抜きだ。  
それぞれ好みのバニーガールを呼びつけていく。

「ネイサン、どうした？」  
「今日は気分が乗らない。飲んだら帰ることにするよ」  
「ねえ、ネイサン。たまには遊べば？」

カテリーナがからかうように言った。振り返ると彼女はわざとらしく脚を組み換え、挑発する  
ようにウィンクをした。

リヴィアたちはああやって幹部達の女性の好みを把握しようとしているのだ。それが弱点につ  
ながる。

「君が相手するか？」

「しないわ」

「なら話は終わりだ」

そう言って立ち去ろうとしたその時、リヴィアが現れた。

店の中で唯一パンツスーツを身につけた彼女は、存在だけでこの店の女王だと知らしめてい  
る。

店だけじゃない、彼女はクラネ・ジェーロの女性スタッフたちのボスでもある。

「今日はただの宴なの？」

アウグストが答える。

「ああ。君にはまた後日休暇を」

「そうじゃないと割に合わないわ。あなた達が楽しんでるのに、私たちは仕事なんて」

「仕方ないだろう。大目に見ろよ」

「ええ、ええ。見てあげる。その代わりお返しはたっぷりしてね」

「分かったよ。それで、わざわざどうした？」

「今日は新人をデビューさせるから、最初にあなた達に会わせようと思って」

リヴィアが背に隠していた女性を前に出させた。

肩までの長さのウェーブヘアは黒。

アーモンド形の目は凜として大きい涼し気だ。

おそらく邦人。

黒のウサギ耳、黒のレースビスチェ、Tバック。薄いストッキングに、黒の足首ベルト付きの  
ハイヒール。白の襟と手首飾りが目立つデザインになっていた。

「……」

ネイサンは思わず彼女の目を見つめた。

戸惑いを隠せない目は、恰好のごとく狙われたウサギのよう。

堂々としていれば別だが、そういう姿は却って煽られるものだ。

喉がいつそう渴いた気がした。

「アジア系よ。バニー、空いてる席に」

リヴィアに言われるまま、「バニー」はネイサンの隣に座った。

目が合うと彼女は気まずそうに視線を下に下げたものの、すぐに顔をあげた。

「お飲み物を？」

「……ああ」

一応、慣れた手つきで彼女はグラスにウイスキーを注いだ。ネイサンの好みをリヴィア達はよ  
く知っている。

すぐに琥珀色の液体が仕上がり、差し出される。

その間、ネイサンはずっと彼女を見ていた。

「フッ。どうやらネイサンも帰らない理由を見つけたらしい」

アウグストは笑うとグラスを持ち上げる。

「クラネ・ジェーロの結束に」

「カポに」

「アウグストの栄光に！」

幹部達もそれぞれ散らばり始めていた。中にはVIPルームに行ったものもいる。

度数のきつい酒が混じっていたようだ。カクテルは飲み口は甘く軽いのに、驚くほど酔いやす  
いものが多い。

さすがに熱くなり、ネイサンはネクタイを緩めた。

汗がにじむ首筋を手で仰ぐと、バニーが気づいて水を勧めてきた。

「ありがとう」

と返すが、彼女は口をつぐんでしまう。あまりトークは上手くない。素人女のようなだ。

(デビューだとか言ってたな……)

酒にはめっぽう強いことも潜入捜査官の条件の一つだが、このままだと潰れかねない。かといって「バニー」を一人にして良いのかどうか。さっきからアウグストが彼女を興味深そうに見ているのが気にかかる。

「あの……大丈夫ですか？」  
バニーが気づかわし気に見つめてくる。  
——ダイヤモンドのように澄んだ目をしている。とてもこんな店には似合わない。

「え？」  
と、バニーが訊き返す。  
「口にしてたか？」  
「あ、はい……」  
バニーは薄暗い店にも関わらず、そうと分かるほど顔を赤くする。  
「……場所を変えよう、バルコニーがあるだろ？」  
「は、はい……」  
立ち上がり、まだそれほど酔いがひどいわけではないのを確認するとバニーを連れ出した。ハイヒールのせいもあるだろうが、意外に身長があり、腰に手を回すとふわふわしたものに触れた。

ウサギのしっぽに見立てた丸い毛玉だった。  
触れた限りではかなり手触りが良い。  
店内にかすかに満ちる香水の甘い香りがより強く誘ってくる。  
早く外の空気に触れよう……と思ったが、あいにく先客がいた。  
ズボンを下ろし、バニーガールの腰を後ろから掴んだ中年の男が。  
「……悪い。嫌なものを見せた」  
表情を固めるバニーの手を取り、とりあえず嫌がられないのでそのまま手首を緩くつかんで歩く。  
(休めるところは?)  
ここで安全な場所と言え、おそらく一つだけだ。  
カウンターに行き、「ネクターを」と頼めば、バーテンダーはゆっくりと頷いた。

シルクの天蓋が二人きりの空間を作り出す、赤紫色のシルクカバーがついた、キングサイズのベッド。  
腰を下ろすとばふん、と音を立てて敷物が沈んだ。かなり柔らかで、質が良い。雲か綿菓子に飛び込んだら、こうだろうか？と想像させるほどのものだった。  
クッションも枕も赤に金の刺繍が入ったもので、いかにも成金趣味。  
ローテーブルには年代物のワインが置かれ、グラスは棚にいくつもある。  
盗聴器とカメラを無視すれば、ここほど安全な場所もない。  
バニーはその場に膝をつき、グラスに水を注ぐ。そう、ワインではなく。  
「……飲まないのか？」  
ここに入れば、どうなるのかは暗黙の了解である。女性たちはこれをチャンスと高級なものをここぞとばかりに楽しむものだった。酔った方が気が楽、というのものもあるのかもしれないが。  
「かなり酔っておられるようですから……」  
リヴィアに誘われる女性たちは、皆同意の上で働いている。  
彼女もそうなのだろうか？  
差し出されたグラスではなく、細い手首を掴んだ。  
濃いブラウンアイズ。滑らかな肌。  
黒髪をそっとかきあげ、耳を見る。  
(やはり邦人か?)  
試しに、とネイサンはささやきかけた。  
「……君は誰だ？」  
日本語で話すと、バニーの目が一瞬大きく見開かれる。  
「私……」  
やはり日本語だ。  
「シーツ」  
ネイサンは沈黙を促した。  
「……ここにはカメラと盗聴器が仕込まれてるんだ。話すなら、小声で」  
「……自分のことは、話せません」  
「リヴィアに命じられてる？」  
「……はい。あの……」  
「話せないなら、話さなくて良い。今日はもう寝よう」  
「えっ……あの……」  
バニーが身体を固くさせた。初対面の男といきなり「する」のだ。緊張しないわけがない。  
「そっちの意味じゃない。今日は元からその気分じゃなかったんだ。君にもその方がいいだろ？」  
「あ……でも、困るんです」  
「なぜだ？」

「その……VIPルームに入ったなら、証拠がないと、マダム・リヴィアは納得しないので……」

「証拠？」

ネイサンはそこまでは把握していない。

一体なんだ？

「あの……つまり……」

バニーは全身をもじもじさせた。眉をハの字にし、これ以上なく困った様子でいる。

「その……精液です」

ネイサンは一瞬思考を止めた。

それからすぐに思い至り、「ああ」と声を出す。

「精子バンクにでも売るつもりか？」

「そこまでは……知らないのですが……でも、少なくともそういう行為をしないと」

「客を満足させられなかったことになる？」

「はい……」

「わかった。こっちにおいで」

ネイサンが手招きすると、バニーは四つん這いになってベッドに登ってきた。

ギシギシと頑丈なわりによく鳴るベッドだ。盛り上げるための演出だろう。

黒のビスチェから見える谷間に目が行ったが、すぐに体が近づくとかすかに艶めく唇がすぐそこ

にあり、目がいちいち追ってしまう。

ずいぶん計算しつくされた衣装だった。

ネイサンの腕の中にすっぽり納まり、彼女は自ら背に手を回した。

その白く細い腕を追い、やめさせる。

「あの……」

「そのまま」

顔を胸に埋め、きつく吸う。花のような甘いにおいがする。香水ではない。

それから首にも、いくつも赤い痕を残した。

彼女を押し倒し、ストッキングを破って脚を開かせると内ももにも吸い付く。

「……ふっ……」

と、バニーはつつまし気に声を隠す。かすかに漂う、青りんごのような、チーズのような酸っぱい匂い。

それがどこから漂っているのか、ネイサンにはわかっている。

細く秘部を覆う「バック。ずらせば「生身の女のネクター」を味わえるということだ。

「……これでいいだろう」

ネイサンは上半身を起こした。

バニーの体に、キスマークが散らばる。

ビスチェからこぼれた乳房はどこよりも白く、青い血管が浮いて見えた。

彼女の肌に触れるたびに、その柔らかさと温かさに心が揺れる。

(他の男には触れさせたくないな)

熱く昂るが、ネイサンはベッドからおりと彼女にカバーを投げ渡す。

「お客様？」

「もう、眠いんだ。その気はあったが、しなかったことにしろ。リヴィアには言うておく。君の数日間を支払うから、と。これなら大丈夫だろう？」

「……でも、その、良いんですか？」

「君はしたいか？」

「……」

バニーはしばらく黙り込むと、カバーをかき集めて体を隠す。

「……緊張して……気分が……」

「だろ。無理しなくて良い」

ネイサンはソファに横になった。

翌朝、ネイサンは軽いふとんをかけられていることに気が付いた。

身を起こすと、広すぎるベッドの隅で、シルクカバーに身を巻いて眠っているバニーの姿が見えた。

その数日が過ぎた夜、ネイサンは「ローアジ・デッラ・レジーナ」を訪れる。

昼間はビジネス・コンサルタントとして街内外の企業と関わる為スーツを着ているが、ここでは普段着だった。

黒のシャツにジーンズ。

上客にはおおよそ見えないだろうが、ネイサンはこの店でくだらない見栄を張る気はない。

女性を喜ばせようと大金をはたいて酒を買う男たちを尻目に、ネイサンはバニーを探した。

今日の女性たちの衣装はベビードールだ。

ドレスとも下着ともつかないふわふわした薄い衣装のため、店内はやや温かく温度が設定されている。

カウンターの奥にいる店舗マネージャーに声をかけ、バニーを連れて来させる。

白のオフショルダーのベビードールを着た彼女が現れ、ネイサンは隣に座らせるとショルダー

部分を持ち上げた。

「何をするんですか？」

と、バニーはくすくす笑った。肩をむき出しにするデザインなのだが、それがネイサンには気に入らない。

「露出がひどい。二人きりなら良いが」

「そんなことを言って、あ、この間はありがとうございました。マダムもご機嫌でした」

「だろうな」

ネイサンの興味を引く女が現れたのだ、アウグストの身边を熱心に探っている彼女には大きな収穫だったはず。

「なぜ分かるんですか？」

「それなりの土産がある、ということだよ」

「？」

バニーは小首を傾げる。そこにあの時つけたキスマークを見つけ、ネイサンは一人頷く。まだ夕方過ぎだからだろうか、それともネイサンに慣れたのかもしれない。彼女にも多少の余裕が感じられた。

「なぜここで働いているんだ？」

ネイサンが突然疑問をぶつけると、バニーはさすがに口を噤んだ。

「……お金のためです」

視線をずらしたため、嘘だな、とすぐに分かったが、ネイサンは彼女の嘘に乗ることにした。

「いくら必要なんだ？」

「ええと……ここでの滞在費……いつまでかわからないから」

「答えられない？」

「……はい」

「危険だろう、嫌な男が多いぞ」

「でも、仕方なくて」

「滞在費が必要なら俺が出そうか？それなら問題ない」

「住むところに困ります」

「ここに下宿してるのか？」

「いいえ。マダムのこっちでの家です。ルームシェアをしているから、急に抜けると彼女たちも困るの」

「……ふうん」

おそらくそれは真実のようだ。彼女は迷うことなくそう答えた。

ネイサンは彼女の手に触れる。バニーは一瞬驚いたようにしたが、避けることはしなかった。

「今夜も一緒に」

と言えば、バニーは少しだけ手に力を込め、それから頷いた。

前と同じVIPルームだ。

リヴィアに怪しまれぬようにしながら、カメラからの死角に入る。

ベッドでもテーブルでもなく、ドア付近。

そこでバニーを抱き寄せ、耳元でささやく。

「日本人だろう？」

バニーは頷いた。

「俺は母親が日本人だ」

「本当？」

バニーは興味を惹かれたらしく、ネイサンの腕の中から顔を見上げてくる。

「ハーフなんですか？」

「そう。父がアメリカ人。……横浜のね」

そう言うと、バニーは納得したらしい。少しだけ寂しげに微笑む。

「だから日本語がお上手……というか、母国語なんですね」

「ああ。君は？」

「私は……田舎の出身」

彼女は自分のこととなると話すのをためらう。

バニーが視線をそらすたびに、ネイサンは彼女が何か大きな秘密を抱えていることを感じ取った。

「そうか」

シースルーのベビードール越しに彼女の体を撫でると、意外にも引き締まった体つきだった。運動をやっている人のものである。

しかししっとり吸い付くような柔らかさもあり、触り心地は良かった。

「お客様、今日は……酔ってませんよね」

「ああ」

「何か、お注ぎしましょうか」

「いや。ここの酒はいまいちだ。知ってるだろ？」

「……度数の高いものを混ぜてること？」

「その通りだ。酒に対する冒とくとしか思えない」

そう言うと、バニーは口角を持ち上げた。  
「すごくお酒が好きみたいなおことをおっしゃるのね」  
「そうだな。酔うために飲むのは好きじゃない」  
「ここの人達は皆そうなりたくて飲むのに」  
「そうか。君は飲みたい？」  
「……今日はやめておきます。酔うと頭が痛くなって、翌日辛いから」  
バニーの手がネイサンの体を撫で始め、細い指先が器用にボタンを外していく。  
あらわになった胸元に、バニーの息がかかった。鳥肌が立つ。  
「待った」  
「……でも……」  
「君の時間を買うのは、この為じゃない」  
「じゃあ、何のためですか？」  
バニーはネイサンの目を見つめながら、シャツ越しに爪で乳首をひっかいた。  
「！」  
「ここ、感じますか？気持ちいい？」  
ネイサンの反応を見るや、バニーは指の腹でくるくるとそこを弄び、ネイサンの鎖骨に音を立てて吸い付く。  
薄く温かい舌が骨をなぞると、さすがに息が乱れて来た。  
「よく”しつけ”られてる」  
「マダムは教えに厳しいんです」  
「だろうな。店の評判を落とすことは決して許さないはずだ」  
バニーは腰をくねらせながら、膝をついた。  
一度だけこちらを見上げ、ベルトのバックルを外し、ファスナーを下ろしてジーンズごと股間を撫でる。  
熱が流れつつあったそこは、鈍い愛撫にどくどくと反応している。が、ネイサンは彼女の手を取ってやめさせた。  
「ちょっと待った」  
「でも、もう……」  
「焦り過ぎだ。もう少し楽しませてくれよ」

空気をたっぷり含んだベッドに彼女を押し倒す。  
ネイサンは知っていたことだが、天涯を下ろせばリヴィアのカメラから隠れられるのだ。  
大体の客はその気になるとその作業が面倒でいるようだが。  
盗聴器は警察から支給された特殊機器を使ってジャミングすれば無効化出来る。  
そうなる気になるのは、さっきから部屋中に漂う甘い香りだ。  
イランイランだろう。  
催淫効果があるとされているが、効果のほどは不明である。  
香りの出どころを探ると、彼女に行きついた。  
「君から香りが」  
「マダムが香水を使いなさい、と」  
「なるほど」  
彼女の耳の裏側、胸元、髪……そこから立ち昇っている。酔った時とは違い、陶醉してしまいそうなものがある。  
この頃出回っている、男を欲情させる香水とやらかもしれない。香りがなためわかりにくく、厄介なシロモノだ。  
「君自身は？何か飲んでる？」  
「……VIPルームに入る前に、お酒を」  
「やっぱりか」  
バニーの手首を取り、内側の香りを確かめる。ここにも香水を感じた。  
腰のモノが熱く疼き、たまらなくなると手首に手のひらにかぶりつくように口づける。  
はあ……と甘い吐息がバニーから漏れた。  
彼女の細い指先を口に含み、付け根まで舌でたどる。女性相手にここまで興奮するのはいつぶりだろうか。  
すでにいきり立ったモノが、彼女に脱がされたジーンズの間から姿を現し始めていた。  
「……ずいぶんキツイな……」  
「お客様……」  
「ネイサンだ。リヴィアから聞いてるだろ？」  
「はい。ネイサン……」  
彼女を起こし、膝の上に乗せる。  
間近で見ると美しい、と思った。  
これはまずい。  
まるで惚れているようではないか。  
たっぴりと潤んだ唇を指でなぞり、荒くなった彼女の息遣いに合わせて上下する胸に触れる。  
唇の向こうで、さっきネイサンの鎖骨を舐めた舌が誘うように蠢いた。

それを求めて唇を触れさせれば、もう後戻りは出来なくなった。  
むさぼるように唾液を絡めとり、自分のつばを彼女に与える。  
舌が行き来してどっちのものかわからなくなるくらいに絡め合う。まるで蛇の交尾みたいなキスだ。

バニーの頬と後頭部を包んで逃げられないようにし、腰のモノを彼女のお尻に擦り付ける。  
熱い息がこぼれ、一瞬口を離すと「はあ……」と上擦った声が鼓膜を覆った。  
吸ったせいで赤くなった彼女の唇からは、どちらのものかわからない唾液が糸をひいて垂れていく——谷間に誘うように落ち、ネイサン視線をくぎ付けにした。

ネイサンは自分で持ち上げたショルダ一部分を下げ、シンプルなチューブトップを取り外し、ベッドに投げ捨てた。

バニーが息を震わせ、ネイサンの手を追って小さな手を重ねる。指先は震えているが、抵抗は見せない。

シースルーのベビードールからは収穫を待つ果実のような乳首が透けて見えた。  
細身だが乳房はふっくらとして、形が良い。手を這わせると、ネイサン愛撫に合わせて柔らかく形を変える。

バニーは口で息をして、乳首をつまむと腰をくの字に曲げて「あっ」と甘く鳴いた。

「なあ、君は誰なんだ？」

ネイサンにはまだ初心者のようなバニーの反応が可愛らしく、このままいじめたい気分と可愛がりた気分とがないまぜになってきた。こりこりと硬くなる乳首の反応を楽しみ、上擦った吐息を聞く。

両胸を揉んで寄せ、そこに集まる彼女自身と香水の香りを肺一杯に吸って堪能する。

酒より気分よく酔わされそうだ。

「私……言えないの……」

ベビードールごと甘く美味しそうに色づいた乳首を舌でなぞる。

バニーは背を反らせて体を跳ねさせ、口を押えた。

「なぜ？」

「……ごめんなさい。お願い、もう聞かないで……あっ」

濡れてはりつくベビードールを脱がせれば、ささやかに秘部を覆うショーツと、ガーターベルト、ニーハイストッキングだけになる。

彼女自身のうぶな雰囲気と、プロの女を思わせる恰好のアンバランスさが、彼女の危うさを感じさせた。

ネイサンは急に目が覚めた気分になり、ぴたりと行動を止める。

(このままして、良いのか？彼女はだたの娼婦だと思えない……)

「ネイサン？」

「……すまない。困らせるつもりじゃなかった」

「え、ええ……でも、あの？」

ネイサンはベッドから降り、突然のストップに戸惑う彼女に背を向ける。

「私、何か……」

「いや、気にしないでくれ。報告を忘れていたんだ」

「なら、それが終わるのを待ってて良い？」

ずいぶん熱心に誘ってくる彼女の様子に、ネイサンは違和感を得た。

男に不慣れな感じがしたが、計算だったのだろうか。

「バニー？」

「あの、私の都合なの。お客様が満足しないなら、別の使い道があるからって、マダム・リヴィアは……」

「例えばAV？それとも、複数を相手に？」

「……」

バニーの顔色が変わった。

「……それで俺を誘った？」

「ごめんなさい。あなたが相手なら……嬉しいと思って」

「ずいぶん殺し文句だが、それは……」

振り返ってバニーを見ると、彼女はネイサン次の言葉を素直に待っていた。

「……」

どうにも駆け引きが出来そうにない。やはりどこかうぶさがあった。

「……バニー。なんでバニーなんだ？」

「えっ？」

「名前らしい名前じゃない」

「それは……マダムが私を、ウサギちゃんみたいって」

「それでか？」

「はい」

「……せめて俺には違う名を教えてくれ。本名は聞かないから……」

もう一度すり寄って、彼女の背に手を回す。

髪を撫でて抱きしめると、バニーの体が熱くなった。



「……なら、”ジゼル”と呼んで」

「ジゼル？」

「……そう、ジゼル。……二人の時だけ、そう呼んで」

可愛いおねだりだ。

彼女が焦る理由は、おそらく本当なのだろう。

リヴィアの店は厳しい。客が不満になれば、店の存続自体危ぶまれるのだ。

「わかった。ジゼル……ジゼル。良い名前だ」

バニーはネイサンの背に両手を回し、シャツをきゅっと掴んだ。

「バックでむきだしのお尻は丸く、白い。つきたての餅のようである。

そっと手を下ろし撫でると、バニー……ジゼルはそろそろと息をする。

呼吸に合わせて彼女の胸が上下し、小さな乳首がネイサンの体をくすぐった。

一度冷めた熱が復活する。

ジゼルの細い首筋を歯でなぞり、肩に軽く歯を立てた。

肌が肌を打つぱんぱんという音と、ぬちゆぬちゆと粘膜を交わす音が天蓋の創り出す空間に響いていた。

すでに彼女の身体はネイサンの前戯によって敏感になっていた。

ジゼルはネイサンの愛撫に反応し、乙女のような恥じらいを見せたのだ。

意外に大きい胸を揉みしだいて乳首を吸ったときの彼女の跳ねるような反応が、その証拠だった。

声を出さないようにと耐える姿が可愛らしく、見ていると暴発しそうになったのだ。そのためネイサンは彼女に背を向かせ、後ろから貫いたのだった。

「ジゼル……ジゼルっ、いい子だ。可愛い……っ」

「あぁあ……！ん～……っ！！！」

滑らかな彼女の背中を覆い、肌と肌をなじませるように摺り寄せる。

細く引き締まった脚を開かせれば、狭いがしっかりうるうるに満ちた膣はネイサンの固いペニスを奥へと迎え入れ、ピストンに合わせて収縮を繰り返した。

中をすりあげるたびにジゼルは甘い声をあげる。耳がおかしくなりそうだった。

そのまま壁に手をつかせ、膝立ちのままの彼女を攻めたてた。

「バックを取ればガーターベルトとストッキング、ハイヒールだけという淫らな恰好。

ネイサンはシャツを開き、ジーンズからモノを出した状態だ。

どう見ても娼婦とその客だろう。誰も見ちゃいないが。

腰をくねらせて中をかき回せば、ジゼルは目じりに涙を浮かべて喘ぎ、ネイサンを振り向いた。

彼女の求めるままに顔を寄せると、ジゼルはキスをねだる。

これでは恋人のSexではないか——口づける度に中がねだるようにネイサンのペニスに絡み、締め付けて来た。

「そんなに締め付けられたら、すぐに出そうだ」

肩で息をして耳元でささやくと、熱い息のぶつかった耳が赤く染まる。

「俺を満足させたいんだろう？」

「は……はい……」

ジゼルは前を向き、息を整える。中が緩くなり、”自由”が効いた。

「可愛いな……ジゼル」

そう甘くささやけば、再び中が締まってくる。

あまりに素直な体の反応。

ネイサンはついにじらしく感じ、顔を真っ赤にして戸惑う彼女の耳に口づける。

そんな軽い愛撫にジゼルは反応を示した。

「……いい子だ」

「あぁっ……！」

腰を揺らし、彼女の奥深くにペニスを突き立てた。

ぽこんとした奥はネイサンの形に驚いたようにざわめき、やがて気に入ったのかきゅうきゅうと吸い付き始める。

ずいぶん大歓迎だ。

ジゼルは喘ぎながら恥ずかしそうに顔を背け、目を閉じるが、思い出したように何度もこちらを見て目をとろんとさせた。

どうやらネイサンに好意はあるらしい。

見おろす彼女の背中には赤いキスマークだらけになっていた。

振動を与える度形の良いお尻が揺れ、それがネイサンをまた煽る。

香水に互いの肌と、汗のおいが混ざり、熱気をはらんで鼻に流れ込む。

元をたどって耳たぶを舐めれば、ジゼルは「あっ」と喘いで背をのけぞらせた。

腰がずいぶん柔らかく曲がり、中からペニスがこぼれそうになるものの、彼女の膣肉がくいついて離さない。

もうたまらない、とネイサンは彼女の腰を掴んで体を密着させた。

ぐいぐいと奥をなぞり、ジゼルの官能を引き出す。  
「んんー……っ！」  
「イキそう？」  
ジゼルは何度も頷き、ついに腕の力をなくして体を前に倒した。  
これでは動物の交尾のよう。ウサギちゃん、と呼ばれることに納得がいてしまう。  
ぼーっとする空気の中、ネイサンは思いのままにジゼルを攻めた。  
激しく求められた彼女の中がきゅーっと締めあげてくる——速度をあげて貫くと、  
「あああ……っ！」  
と、ジゼルはひときわ高い嬌声をあげ、体をびくびく震わせた。  
秘口がきゅっと根本を締め付け、絞り出されるままネイサンも熱を放出させる。  
「く、ううっ！」  
ビューッ、と勢いよくジゼルの中で発射され、渋るような残りを絞り出すために彼女の腰を押さえつけると腰を突き上げる。  
「……あっ、う……っ」  
こらえきれず声が出る。  
ジゼルはすでに激しく胸で息をしている状態で、とろんとした涙目でネイサンを見ていた。  
(何か”訳あり”なのではないか……)  
そう期待が滲む。彼女からは、加害者が持つ危険な気配がないのだ。  
それに、ネイサンをうっとりしたような目で見上げてくる、アーモンド形の目が美しい。  
(もし娼婦なら名演技だ)  
半開きの口で息をする姿が可愛らしく、快樂に打ち震えるペニスを抜いて彼女をこちらに向かせる。  
向き合ってキスをし、彼女の舌を飲み込まん勢いで絡めとって吸い上げ、まだ余韻に震えているジゼルの秘口から指を入れて、中をぐりぐりと弄んだ。  
「んんっ……やあ……っ」  
とろとろの淫蜜をかきだし、舐めとる。咲いたばかりの花のような、酸っぱい匂いだった。  
絶頂が来ればそれまで、と思っていたSex後の冷めた気分は一切なく、むしろ深い満足感と彼女を可愛いと思う気持ちが押し寄せた。  
それに追従するようにペニスがまた勢いを取り戻す——  
「もう一回……いいか？ ジゼル……」  
コンドームを引き抜き、再びジゼルを組み敷いた。

3回目の射精の後、ネイサンはようやくジゼルを解放した。  
しっとり汗ばんだ体を抱き寄せ、髪を撫でて耳に口づける。  
ジゼルはぐったりしていたが、ネイサンの胸に頭を預けると深く息をする。  
もう眠そうだ。まぶたは今にも落ちそう。  
「なあ、ジゼル……このまま店にいるのか？」  
「ん……はい……」  
ジゼルは頷いた。ネイサンはやはりか、と思いながらも続ける。  
「なら、他の男に触れさせるなよ。金があるなら、俺が払う。とにかく君に触れられる客は俺だけに」  
ジゼルは目を見開いてネイサンを見たが、すぐに笑みを浮かべた。  
「……嬉しい」  
だがすぐに表情は曇っていく。  
「でも……マダムが何ていうか……」  
「リヴィアか……」  
あの魔女。金のために彼女の誘いに乗った女も女だが、店のために女性も客も食べ物にしている。彼女の懐を知れば、たいていの者は怒りを見せるだろう。  
それに何より、現地警察官であるレオナルドが言うには「絵を盗んだのはリヴィアかもしれない」という報告があったのだ。  
確かな証拠はないが、真夜中に走る車には二人の女と後部座席に何かが乗っており、目元が見えていたと防犯カメラにあったのという。目の色は緑。リヴィアと一致している。  
ネイサンはまさかと思いながらジゼルに訊いた。  
「……ジゼル。絵を知らないか？ 金箔で飾られた女性の絵だ」  
そう言うと、ジゼルはぱっちりまぶたを持ち上げてネイサンを見る。  
唇が開き、何かをつぶやいて……「知りません」と言った。視線が下に落ちたが、眠気なのか嘘なのか、この時のネイサンには分からなかった。  
「そうか……探しているんだ。この店かどこかにあると聞いて」  
ジゼルは下唇を軽く噛むと、まっすぐに見つめて来た。  
「なぜ探してるんですか？」  
どこか固い口調だった。  
「……欲しいと思って。かなりの名品で、しかも作者不明の珍品だと聞いたんだ。事務所に飾れば、顧客の目を楽しませられる……いや、気にしないでくれ」  
ジゼルの細い肩を抱き、横を向くと目を閉じる。彼女の背中が微かに震えた。

「……絵……」

と、ジゼルのつぶやきが聞こえてきたが、それだけだった。

アートは時として人を狂わせる。

50万で売ってくれ、ダメなら100万で、いや、鑑定士が価値をつけたなら、もっと……

そうやって価値は膨れ上がり、「それを所有している」という満足感がアートへの価値をもっと強めていく。

恐ろしい話だ。

アートそのものの美しさだけなら、おそらく無名のアーティストのものでも同等の価値がある。

なのに鑑定士、アートバイヤー、美術館、それが認めた歴史的価値となれば同じレベルのアーティストでも雲泥の差がついてしまう。

欲望は暴走し、所有欲をみだすだけの物となれば、美しさを認めてくれる者の手に渡すのは難しい。

旬果はそれをよく見て来た。

「金ならいくらでも出す」

そんな言葉をいくつ聞いたろう？

だが旬果も、上司の綾香も、そんな個人客の言葉よりも「展示することでたくさんの人と価値を共有したい」と言ってくれる顧客との付き合いを大事にしていた。

ダンテ神曲展のために、美しい作品を——そんな思いでやってきたのに、気づけばこんなところにいる。

金箔で飾られたベアトリーチェ。ダンテにより天国の住民となった彼女を、こんな形で汚して良いのだろうか。

だが旬果は絵を守れなかった。

絵はとっくにリヴィアの自宅に押し込められ、再び暗い世界で眠ることになった。

ネイサンがその絵の話をして、どれだけ驚いたことか。

——アウグスト側の者には、一切しゃべっちゃダメよ。

朝の店内、リヴィアはカテリーナと旬果の3人になると言った。

「こんなチャンスはないわ。アウグストの弱みを握れるかもしれない。この絵の裏に書かれたパズワード……これがあいつのアキレス腱になるの。あとは彼が持ってるノートパソコンを手に入れば完璧ね。まあ、万が一絵のことがばれても問題ないわ。たまたま手に入れたと言えば良いだけだもの……バニーが店で働くために手土産をくれただけってね」

リヴィアの指摘に旬果は体を硬直させた。

そんな事実はない。

あの時、盗みに入った彼女たちの顔を見てしまったのだ。

運が悪いかと言えない、もう少しだけ部屋に帰るのが遅ければ、ただの盗難として泣き寝入りして終わりだったかもしれないのに。

「カテリーナに聞いたわ。ネイサン、あなたに夢中なんですってね。昨日は何回やったの？」

リヴィアのあけすけな質問に旬果は絶句した。

「大事な質問でしょう。男は出すもの出したらその対象を嫌いになることがあるの。気に入られてるなら何度かしたんじゃない？それとも、回数はしてないけど添い寝した？」

「……」

答えられないでいると、カテリーナが代わりに話す。

「内容は残念ながら、盗聴器バグってたの。カメラも死角に入ってる。でもネイサン、バニーを気に入って料金を倍払ったのよ。条件はこう『他の客を取らせるな』ですって」

「ふうん。ネイサンの好みってお上品な子なのね。まあいいわ、固定客がつくならこっちにもメリットがあるから。バニー、良かったじゃない。ネイサンは見た目は狼みたいだけど、けっこう紳士でしょう。ビジネスコンサルタントでもそれなりに成功してるわ。あなたついてるわよ」

旬果は首の関節がギイギイ鳴るのを感じながらリヴィアを見た。

ついてる？

まさか。

こんな目に遭わせておいて？

「ネイサンの条件を飲んであげる。バニー、他の客は取らなくて良いわ。ただし彼を惹きつけておいて。ネイサンは他の子には靡かなかったのよ。あの男はアウグストの気に入りの右腕だから、上手く取り込めば役に立つわ」

「……マダム、私はいつまでここにいれば良いのですか？」

「アウグストが持ってるノートパソコンから情報を奪うまでよ。そうしたら解放してあげる、即刻日本へ帰してあげるわ……帰りたいならね」

「どういう意味です？」

旬果は眉をひそめた。帰りたいに決まっているだろう。

ところがリヴィアは旬果を見るや、顎を持ち上げてせせら笑った。

「あのね、男を見下して支配し、大金を稼げる最高のお仕事なのよ。私の店で働きたい女の子な

んていくらでもいるわ。それに、条件さえ満たすならネイサンの愛人におさまって店から卒業しても良いのよ。どちらにせよ地味に働くよりよほど早くお金持ちになれるわよ。稼いだ金はゴールに換えなさい、そうすれば世界のどこだってリッチに暮らせるから」

金に困っているなら、確かに魅力的なことなのかもしれない。

だが旬果はアートバイヤーの仕事に誇りとやりがいを感じている。そのための努力や情熱を踏みにじられた気分だ。

スカートを握りしめ、下を向く。

「カポに近いのは私。リヴィア、私が情報を盗むわ」

「そうね。バニー、カテリーナのサポートをしなさい。早ければ早いほど、あなたの願いが叶うのも早くなるわ。そのためにもネイサンを上手く落としておいてね。彼は勤が鋭いから」

さて、とリヴィアが立ち上がり、旬果にささやいた。

「ウサギちゃん。狼に食べられないようにね。それと、警察や大使館に逃げるそぶりを見せたら、これ、世界中にばらまくわよ」

ネイサンに惚れるな、ということだろう。

そしてリヴィアはスマホの画像を旬果に見せる。

薄暗い店内。旬果は下着同然の姿で歩いている。

その奥で起きる売春。

これを世界が見れば、どう思うか——考えただけでも絶望的だ。

唇を噛んで耐えていると、リヴィアはご機嫌なまま店を出た。

ネイサンはまた数日後にやってきた。

旬果は「ジゼル」になり、呼び出しに応じてバーカウンターへ向かった。

足取りは軽くなり、彼の姿を見つけると胸が高鳴った。

「ネイサン」

挨拶もそこそこに、隣に座るとネイサンは旬果を上から下まで見る。

「今日はシャツか」

いわゆる彼シャツというやつで、男性物のシャツ一枚を着た状態だ。

柄物、色物と色々ある中、旬果に支給されたのはシルクの白だった。

お泊りデートを思わせる恰好で、見つけたカテリーナは「コスプレって楽しいわ」と言ってネイビーの薄いものを着た。

ネイサンは旬果のボタンを上までしっかり止め始める。上から3つ外し、黒のブラが見えるようにと指定されていたのだが、それが彼には気に入らなかったようだ。

「君は白が似合う」

「黒の下着は好きじゃないんですか？」

「場合によりけりだ。何か飲む？」

ネイサンはバルコニーに移動し、店内からは見えない端へ旬果を導いた。

カーテンはベルベットで、外壁はグレージュの石。もしかしたらこの店も古い歴史があるのかもしれない。

「ジゼル」

と、二人にしか聞こえないようになるとその名で呼ばれる。

とっさの偽名だが、熱を込めて自分で名乗った名で呼ばれると体が熱くなった。

(恋してるみたいだわ)

だが彼はあくまでも「客」である。それも、リヴィアが警戒しているアウグスト側の人間。

そんなことは旬果にはどうしても良かったが、少なくともネイサンが「マフィア」の者だということは分かっていた。

その証拠に、彼の左手首には氷を連想させる、6方向に伸びる3本の線が刻まれているではないか。

「食べに出るか？」

と、ネイサンが行った。

店は開かれたばかりで、6時である。夕食を考えて良い時間だが、旬果はグラスを握ると首を横にふる。

「ダメなんです」

「なぜ？」

「……あまり外出してはいけないと」

「おかしな話だ。カテリーナも他の子も、昼間は自由だろ？」

「そうですけど……」

上手い嘘が出てこない。ネイサンの目は温かみのあるアンバーアイだが、見つめると芯の強い光が宿っていて何もかも見透かされそうで怖かった。

「……マダムに許可を取らないと」

ネイサンはふーっと息を吐きだし、街へ視線を移した。

「そうか……なら、連れ出すには彼女の許可を取れば良いんだな」

「そんなこと出来ますか？」

「出来るさ」

「……」

旬果は彼を見つめた。アウグストの右腕と聞いていたが、幹部であるリヴィアにも影響力があるのか。

彼なら、自分を助けてくれるのではないかと。

そんな考えがよぎり、手を伸ばし、触れるか触れないかで手を止める。

(それだと、人を利用しているのと一緒に……)

だがこれでは自分はどうなってしまうのだろうか？

カテリーナを助け、ノートパソコンを開く。

それでも良いのだ。そうすればここから出ていけるのだから、ネイサンを利用するようなことはしなくて良いのではないかと。

「……今日は帰るよ」

ネイサンはぼつりと言った。

「え？」

「顔が見たかっただけだ。元気そうで安心した。じゃあな」

「あの、でも……」

「リヴィアに話はつけてる。他の客を取るなよ」

ネイサンは旬果の肩を撫でると、背を向けて行ってしまった。

「ネイサン、帰っちゃうの？」

「たまには相手してよ」

「悪いな、仕事だ」

彼に何人かの女性が声をかけ、ネイサンは慣れた様子でいなしていく。

バルコニーから見ると、彼の車が走り去った。

途端に体が重くなった。

——絵を知らないか？金箔で飾られた女性の絵だ。

探しているんだ。この店かどこかにあると聞いて、とネイサンは言った。

アート欲しさに大金をつぎ込む人はたくさんいる。

彼がそうだとはいえないが、彼が言う絵は旬果が競り落としたもの。

何人かが欲しがった。

価値はあるのだ。

リヴィアのイタリアの自宅は、彼女は住まず店で働く女性たちが下宿先としている。

十分に広い一軒家で、一人一人に個室が与えられており生活に困ることはない。

庭には観葉植物とプール。サウナにジムも完備され、どこにも不便はない、ここだけで生活は完了する。

食費も水道光熱費も払わなくて良い。

そして家の前には用心棒がついており、セキュリティはばっちりだ。

つまり誰も逃げようと思えないのである。

旬果は一人部屋でベッドに入り込み、睡眠薬を飲んで無理に眠るのが日課になっていた。

だが今は上手く眠れないでいる。

ネイサンがいなくなったら、どうなるのだろうか？

翌日には店にネイサンが現れ、VIPルームに入った。

前とは違い、シルバーアロワナが泳ぐ水槽付きの部屋。

青の照明が深海を思わせる作りになっており、広々したソファとベッドはいずれも黒の革張り。

本当なら数人で楽しむ部屋なのだろうが、ネイサンは旬果一人指名して、後の女性を寄せ付けなかった。

いつか違う女性も混ざるのだろうか、などと考え、気分が悪くなった。

そういうプレイを楽しむ余裕は旬果にはない。

レースのハイネックミニドレスは黒。ネイサンは好まないかもしれない。

ソファの背もたれに肘をつき、アロワナがゆったりと泳ぐ様を見ていると、隣にネイサンが腰かけた。

「成金趣味だろ」

「この部屋？」

「いや……店全体」

「お気に召さない？」

「ああ」

ネイサンが手を取った。

旬果は素直に応じて彼の膝にまたがる。

スカートはズリあがり、薄ピンクの下着が現れた。

「こっちに」

ネイサンは手招きし、旬果はそれに従って彼に抱き着く。

じわじわと彼の体温が肌に触れ、たまらなく心地よかった。

彼の大きな手は背を撫でた。

香水のついていない彼の、香木のようなにおいが好きだ、と旬果は気づいた。首元に鼻を近づけ深呼吸すると、体温もおいも全て混ざって溶けてしまいそう。このまま時間が止まれば良いのに……そう考えた瞬間、ネイサンが身体を離れた。

「ネイサン？」

「……すまない。君には失礼だった」

「……えっ？」

何の事だろうか、と首をかしげると、ネイサンは腰を撫でた。

「勘違いを。君には仕事なのにな」

「？」

なんの話だろうか、と旬果はますます疑問を深めた。

「どういうことですか？」

「店で求めるものを間違えた。君は……ガールフレンドじゃない」

胸に鉛を埋められた気分になった。

確かにそういう仲ではないが、改めて言われるとショックだ。

唇を噛んでいると、ネイサンはやはり旬果をどかそうとした。

「……待って。それなら、仕事をさせて」

「ジゼル」

「……そんな悲しいこと言わないで、ネイサン。今だけは、ガールフレンドに」

「それは……」

ネイサンは眉をひそめた。

「出来ない……ですか？他にそういう人がいるの？」

「いや」

「なら、ねえ、お願い。今だけ……今だけ、私をガールフレンドにして？」

ソファに膝をつき、体を起こす。ネイサンの体を撫で、顔を上向かせるとキスをした。

ふっくらした唇。自分から触れると感触が違う。

角度を変えて深め、舌で唇を舐めるとネイサンの手が腰に登ってきた。

舌が触れるとじんじんと電流が流れるようだ。

深く求めて入り込み、舌を見つけると吸い上げる。

「ふ……っ」

と息が苦しくなり、口を離すと二人して息を荒げた。

シャツのボタンを外し、筋肉質な分厚い胸板に直に触れる。心臓の鼓動が手に伝わり、首に口づけると脈動を強く感じる。

(生きてる……)

当たり前のことになぜか嬉しくなり、旬果の世界が色づいた。

小さい乳首に息を吹きかけ、ぴくんと動く彼の反応を見る。

男性を愛撫するのは、こんなに嬉しいものだったのだろうか。旬果には未知のことだったが、相手が彼だということもあってやりがいがあった。

舌で乳首を押しつぶし、舐めて吸い上げると、ネイサンは息を乱した。

(可愛い)

上目遣いに様子を伺うと、ネイサンは唇を噛んで耐えているような顔をしていた。

感じてくれている、そう分かると、ショーツの中で奥が疼いた。

VIPルームに入る前、支給されるドリンクのせいだろうか。

体は熱くなってくる。

「ジゼル……ちょっと待て」

「どうして？」

「刺激が強いぞ」

「気持ちいいって意味ですか？」

ネイサンは少し黙ると、旬果を見つめて言った。

「ああ……」

熱の混じった声。

旬果の心臓がどきどき鳴った。

唾液で濡れた乳首が青の照明でぬらぬら輝く。もう片方も舌でいじり、手を下ろした。

ストラックス越しでも分かるほどに、彼のモノは反応している。

睾丸から包むようにして全体を撫であげると、すぐに大きくなった。

ソファから降りて、ラグの敷かれた床に膝をつく。

「ジゼル。脱がして良いか？」

ネイサンは体を折り曲げ、旬果の後ろに手を回す。

ボタンが外され、ファスナーが降りるとドレスがずれた。

カップ付きのため、ドレスが降りると胸はそのまま出てしまう。

こぼれた乳房をネイサンの手が撫でていった。

「あん……っ」

声思わず出てしまう。ネイサンを愛撫しているだけなのに、旬果の体はすっかりその気になって、敏感になっているようだ。

「良い声だ」

可愛い、とネイサンが髪を撫で、顔を上向かせた。  
目を閉じると口づけが降りて来て、さっきよりもよほど激しく舌を求められた。  
濡れそうなほどに口内をかき乱され、解放されると息があがった。  
「もうキスはだめ」  
「そんな悲しいことを言うなよ。君とのキスは好きなんだ」  
「……それ言うの、ずるい」  
ネイサンはふふっと笑った。  
旬果は口を尖らせたが、彼のスラックスと下着からすっかり仕上がったペニスを取り出す。  
体格の良い彼に合う、大きなモノだった。笠は広がり、竿は筋肉質な亀の首みたいに硬そうである。  
思わずごくりと唾をのむ。口に入るだろうか。  
旬果は不安に思いながらも、ペニスの根元を持つとゆっくり上下した。  
「ふう……」  
と、ネイサンは耐えるようにしながら息をゆるゆる吐き出す。  
ぬめぬめと先走ったカウパーで濡れ、裏筋にそれが流れていた。  
それを舌で追ってなぞり、甘じょっぱさを舌に感じながら先端までなぞる。  
ペニスはびくびくと反応し、また伸びたような気がする。  
充血した先端を舌でつつき、ネイサンの顔を見ると口に含む——  
「ジゼル……焦らなくても、良いから……っ」  
ネイサンが旬果の顎を持った。  
「君への支払いは済んでる……だから、無理するな……」  
だから身を売ることをしてなくて良い、と彼は伝えているのだ。旬果は胸が解放されたような気になり、目を見開き、素直に喜んだ。口を離し、「本当？」と聞く。  
ネイサンは息を整えながら「ああ」と返す。  
「……嬉しい、ありがとう……」  
でも、それとこれとは別だ。  
旬果はネイサンの太ももに手を置いて、左手で竿を掴んだ。  
新しい蜜をしたたらせるネイサンのペニスの先端を、舌全体で舐め包んだ。  
「待った、ジゼル……なあ……！」  
頭まで熱っぽくなってきたみたいだ。  
旬果は夢中になってペニスにしゃぶりつき、喉まで入れ込む。  
ごくん、と喉を鳴らすとカウパーがまとめて喉を流れ落ちていく……子宮がきゅんきゅんしはじめた。  
もうショーツは用を果たさず、腿にいやらしい蜜が流れていく。  
「ああ、はあ……」  
息を荒げて髪を耳にかけ、啜えると強く吸い上げた。  
「出る……、口、離せ……ジゼル……っ！」  
ネイサンが腰を貫くように動かし、促されるままペニスは噴火するように白濁液を吹き出した。  
旬果の喉にぶつかり、口におさまらなかった分が顔にかかる。  
「熱い……っ！」  
精液が額から流れ落ちてくる。旬果は目を閉じ、口で息をしたが、やがてネイサンの指が口に入り込み、舌を撫でてくる。  
「……すまない。早く、吐き出せ」  
旬果は涙目になったが、ネイサンの手をどかせるとそのまま飲み込んだ。  
吐き出すなんてもったいない。  
「な……ジゼル……」  
ネイサンは言葉を失くしたようだったが、すぐに旬果の顔を向かせた。  
「……焦らなくて良いと言ったのに」  
「……だって……」  
「だって？」  
「……嫌じゃなくて……」  
言葉にすると、恥ずかしさからか体が熱くなった。  
自分は一体、何をしたのか？  
ネイサンは目を見開いていたが、やがて旬果の髪を撫でると腕の中に包んだ。  
「……ごめんなさい。嬉しくなって」  
「嬉しいよ、でも、無理はさせたくない」  
ネイサンは優しく言ったが、旬果はおかしくなって笑ってしまった。  
「あなたが言うの？」  
「あの時は……分かっている。がっつきすぎた」  
ネイサンの手が肩を抱きしめた。  
「……なら、謝る前に、もう一度」  
「え……」  
「君も欲しいだろ？ここ、もう濡れてる」

ネイサンの指がショーツの中に滑り込み、もうとろとろでぐちゃぐちゃになった秘部に触れた。彼を欲しがって震えていた熱いクリトリスがいじられ、ちゅぷちゅぷ音が立てられる——旬果はネイサンに軽々抱き上げられ、ベッドに連れていかれた。

黒のレースハイネックミニドレスをベッドから捨て、素裸で抱き合う。ネイサンは深く舌を絡めながら、ぶっくり膨らんだ旬果のクリトリスを指でなぞり、押しつぶし、きゅっとなで反応を確かめるようにしていた。

「あっ……」  
と腰が跳ねると同時に声が出てしまい、旬果は口を押えてしまう。

「我慢するなよ」

「だって……恥ずかしい……！」

ちゅぷちゅぷ音を立てて攻められると、たまらずいやらしい声が出る。

ネイサンは耳にキスすると秘部から手を放した。

手のひらいっぱいねっとり淫蜜が絡みつき、薄暗い部屋の照明で輝く。

「もう、見せないで……」

「嫌なのか？　ここ、こんなに感じて可愛いのに」

「はうっ」

ごつごつした膝が急に秘部を撫でた。まだ敏感に快感を求めるそこは、思いがけない刺激にまた愛液をもらす。

「ベッド汚れちゃう……」

「なら舐めとろうか」

「え、あ……だめっ、だめっ」

「なぜ」

旬果は慌てて体を起こしたが、ネイサンの方が早かった。

彼は易々と旬果の脚を開かせてしまう。

この時ばかりは柔らかい体が恨めしい。スムーズに両ひざは上半身に近づき、秘部は天井を向かされてしまう。

旬果からは見えないが、彼にはぴくぴくと息するように動く、旬果の全体が見えるはずだ。

「舐められるのは嫌いかな？」

「嫌いとかじゃ……っ！」

柔らかい舌が陰唇をなぞりあげた。

「な、舐められたことないの」

今まで感じたことがない、未知の快感だった。

熱く柔らかく、しなりのある舌が薄い秘部を丹念に舐め、唾液と愛液が交わる。

こりこり固くなったクリトリスが舌で包まれると、じわっと溶けそうな快樂が広がった。

「……！だめだよお」

「そう言われてもな……そんな可愛い姿を見せられたら、たまらない。もっと見たくなる」

旬果は口を閉ざし、ぶんぶん顔を横に振る。

「汚いでしょう？」

「君はどこもきれいだよ」

ネイサンは即答し、脚を持ち上げ、付け根、内もも、淫蜜をしたたらせる秘口を舌で辿った。

「君だって俺のを」

「あれは……だって……その……」

夢中になって、とは言いつらい。

「俺が”客”だから、か？」

それはもっと言いつらい。旬果は結局、娼婦のプロにはなれそうにない。

答えられないまましていると、ネイサンは口を離れた。

「すまない。つい意地悪を」

体がすっと近づき、ネイサンの手が旬果の頬を包む。

目が合うとアンバーの色が濃く見えた。暗い室内で、満月のように輝いている。

額に口づけがおり、目を閉じると唇が触れ合った。

ネイサンの手は下肢に伸び、充分にとろけてぐずぐずになった秘口へたどり着く。

すんなりと節だった中指が入り込み、中の壁を探られる。

「どこが好きなんだ？」

「……お腹の方……」

「ここ？」

くりっ、と関節が曲げられたが、少し違う。

ネイサンは旬果の顔を見つめながら、中を探っていく。

旬果は思わず自分の体を抱くようにし、胸を押しつぶした。

(あっ、どうしよう……)

彼の指が動くたび、腰がざわざわと揺れ始めた。

このまま気持ちいい所を見つけれたら、どうなってしまうのだろうか？

ネイサンの指がすっと壁を擦った。



「あっ！」  
腰が跳ね、見つけた部分をネイサンはくいくいノックし始めた。  
「あっ、待ってえ……」  
「ここが好きか。ん？」  
「やああっ」  
意思とは関係なく、腰が貪欲に快楽を求めて弾む。  
「あっ……気持ちいい……」  
「良いか」  
「すごく、いい……っ！」  
撫でられるたびにじゅわっ……と快楽が全身に広がり、ついにパンと弾ける。  
「あ……っ！！」  
上擦った声が口から出ると同時に、体は絶頂の波に乗って若い魚のように跳ねた。  
全身を震わせて快楽を逃がすようにしていると、ネイサンが前髪をかきあげて首元に顔を埋め、髪に指を絡めるようにして頭を抱く。  
「挿入でも、良いか」  
いつもとは違う熱を帯びた声は震え、奥を疼かせるには充分だった。

「ネイサン、気持ちいい……？」  
熱で浮かされたような中、そう訊くと、ネイサンは旬果の頬を撫で、「ああ」と吐息混じりに答えた。  
「気持ちいいよ。君の中……熱くて、とろとろで……とても。頭がおかしくなりそうだ……」  
ゆったりと、泳ぐように、ネイサンは中を自在に往復していた。  
たっぷりの淫蜜。  
ネイサンは奥を突くというより、優しく深く、情熱的なキスをするように擦りつけている。  
激しくされるよりも快感は深く、全身が溶けてしまいそう。  
ネイサンは乳房を揉んだかと思うと、きゅっと乳首をつまみ、体を折り曲げるとそれを唇で吸った。  
「はあ……あ」  
じんと子宮に響くような快楽に体が跳ねあがり、喉を擦って声が出ていく。  
熱くて頭まで官能でいっぱい。  
もう声がどうとかも気にならないほど夢中になっている。  
興奮に瞳を開き、眉を寄せて汗をにじませる彼は、今は自分のものなのだ——そう思うと、胸の奥がきゅうっと締め付けられる気がした。  
手を伸ばして彼の背中を抱き、深い快感に爪を立てる。  
ネイサンが腰をぐいぐい早め、唇を重ねた。  
唾液が絡まってあふれ出る。落ち着く間もなく快楽が身体を駆け巡り——  
「ああっ！」  
「あっ……うっ！」  
と二人の声に驚いたアロワナが跳ね、水をばしゃばしゃと打ち付けた。

「ジゼル。ジゼル……君は誰だ？誰なんだ？」  
互いの体温で溶かし合うような情事後、ネイサンはまっすぐに見つめてそうささやく。  
茶化するような雰囲気はなく、真剣なまなざしだ。そらすことが出来ず、でも答えられずに旬果は唇を噛む。  
（言ったらどうなるのだろうか？自分はアートバイヤーで、運悪く犯人の顔を見てしまったから、さらわれた……なんて。彼もマフィアなのに……）  
だが、Sexでは旬果を快楽に導いて、ガラスに触れるような繊細な愛撫を施す。  
その手を信じたい気持ちもあった。  
「……ねえ、ネイサン」  
話しかければ、彼はちゃんと目を見つめてきた。  
「ん？」  
「絵が欲しいって言ってたけど、どうして？他の絵じゃダメなの？」  
そう問かけると、ネイサンは旬果を見つめたまま姿勢を変える。  
手を伸ばして旬果の肩を撫でて、ようやく口を開いた。  
「……一目ぼれしたんだ」  
旬果はつい、自分に向けて言われたのではと感じてしまい、心臓が熱く跳ね上げてしまった。  
どうかしているとしか思えない。  
こんな状況下だから、彼しか頼れないから、期待しているだけだ……そう自身に言い聞かせようとするも、ネイサンの目はまっすぐに旬果を捕らえ、アンバーの色を濃くしているものだから、冷静になるのが難しい。  
「ジゼル……」  
ほら、その名前を呼ぶ声。  
どんなお酒よりも深く濃く、旬果を酔わせてしまうような甘い響きに満ちている。  
肌を重ねながら呼ばれると、耳からイカされそうになるのだ。

「な、なんですか？」  
「絵の話は、もう良いだろ？こっちへ」  
ネイサンは旬果を腕の中に招き入れ、背中を抱くとふーっと息を吐きだす。  
「ネイサン……」  
「ジゼル。もうこんな店、早くやめてしまえ」  
力のこもった声だった。同時にネイサンは強く旬果を抱きしめる。  
その言葉を嬉しく思うが、同時に胸の奥が苦しくなった。  
「……それは……無理なの……」  
ネイサンは唾を飲み込んだ。のどぼとけが上下し、彼は首を横に振ると力を緩める。  
「……そうか……」  
「あの……」  
ネイサンは放してくれそうにない。彼の香木のような、男っぽく香しく、旬果を安心させるに  
おいに包まれるとだめだった。  
このままこうしていられたらどんなに幸せだろう。  
そんな甘い期待を抱かずにいられない。  
それが怖くなり、旬果は彼の胸を手のひらで叩く。  
「……放して……？」  
「もう少し、このまま……こうしていると、落ち着くんだ」  
「……もう」  
「可愛いな。君は」  
髪にネイサンからのキスが落ち、旬果は顔を熱くさせながら目を閉じた。

道路をひた走り、山にあるレモン果樹園でネイサンはスマホを取り出した。  
相手はイタリア警察のレオナルド。助手席にはプロレスラー体型のスキンヘッドの男——ヴィ  
ットリオというアウグストのボディガード兼清掃員だ。  
「マッテオが残したパソコンを発見した」  
ネイサンが言うと、電波にのってレオナルドが答える。  
「どこにあった？」  
「アジト——ロッカ・ディ・ルチェの大広間、そこにある棚だ」  
「本当か。よし、次だな。データを盗むか、パソコンごと盗むか」  
「データを盗む時間が惜しい。ダミーパソコンを用意してくれ、入れ替える」  
「わかった」  
「それと、パスワードが書かれた絵だが、ローアジ・デッラ・レジーナにはない」  
「だとすると、どこだ？」  
「わからない。あり得るのは、リヴィアのこっちでの家、それかモナコのマンション。倉庫を借  
りた形跡はないんだろ？」  
「ああ。パスワードを見て、後は燃やしたとか……」  
「それはないだろう。アウグストに殺されるぞ」  
「だよな。じゃあ、やはりどこかにあるんだ」  
話はさかのぼるが、半年前に幹部のマッテオが殺された。  
彼は組織の裏切りを考えていた。彼は一人で実行するつもりだったらしく、クラネ・ジェーロ  
の情報全てをノートパソコンに網羅。警察に売り、自らの保護を求めるつもりだったらしい。  
ところがそれに気づいたアウグストは彼を撃ち殺してしまった。  
彼はセキュリティとハイテクの名手である。パソコンには3重のファイアウォールが設定され  
ており、パスワードを3回間違えると中の情報は全て消え去ってしまう仕組みになっていたの  
だ。  
そしてアウグストは考えうるパスワードを2回試している、もう失敗は出来ない状態だった。  
ノートパソコンの中には組織が集めた顧客情報もある。  
消えればアウグストは信頼を失い、組織は弱体化を免れない。  
そしてマッテオはアウグストに見つかる間際、「パスワードは絵に書いた。奴に見つかれば殺  
される、早く助けてくれ！」と通話履歴を残して死んだのだった。  
ネイサンは日本からやってきた潜入捜査官である。  
邦人がテロに関係するのではと思われる武器密輸に手を染め、探った結果このクラネ・ジェー  
ロに行きついたのだ。  
ネイサンは邦人の情報求め、早3年をここで過ごしている。  
問題は上官の田中にやる気がないことだった。  
「しかし運が悪いんだか良いんだか……アジアのアートバイヤーがその絵を買っちゃったんだ  
ろ？そのアートバイヤーはどこに行ったんだ？」  
「さあ。オークションはクラネ・ジェーロの影響を受けていないし、顧客情報を死んでも守る  
さ。客からアジア系だったと聞けただけ収穫あったと思うしかない」  
「ホテル中を当たったけど、それらしい宿泊客はいないって……失踪届は出てたが」  
「失踪届？」

「ああ、でも、こっちの係が一応問題なしってしたんだけどな。大使館に問い合わせたけど、大丈夫とかで」  
「しっかりしろよ、アウグストはお前のとことも多少取引があるんだから」  
「わかってる、わかってる。とにかくリヴィアを張るしかない」  
「通話を切るとヴィットリオを振り向く。」  
「お前はカテリーナを」  
「あの金髪のか。アウグストのスケジュールはもう良いのか？」  
「ある程度は押さえてる。問題はパソコンだ。いつ奪うか。それと、怪しまれないうちにパスワードも手に入れなければ」  
「同時にやるのが理想だろ？絵のありかを確保しねえとなあ」  
「ああ。リヴィアのこっちでの家を探すか」  
「任せな、俺の家族が掃除のプロなんだよ。とくに母ちゃんはぞっとするほど潔癖症で……」  
「ヴィットリオは外見に似合わず、人好きのする笑顔を浮かべて見せた。」

旬果に腕時計がつけられた。  
見た目は女性向けの金属製の時計だが、GPSが仕込まれている。  
これで彼女がどこに行こうともリヴィアかカテリーナが把握できるという事だ。  
「俺と一緒にんだから、警察に行くわけないだろ？」  
「ダークグリーンのシャツを着たネイサンが念押しをする。」  
「彼がリヴィアに直談判したのがこの腕時計だった。」  
「うるさいのよ、ネイサン。あなた、表じゃただのビジネスマンよ。警察だってクラネ・ジェーロの者と思っただけかもしれないじゃない。とにかくバニーを貸してあげるけど、夕方には帰して」  
「彼女は店に出なくて良いだろう？」  
「シフト管理よ。それに、アジア系もいるというバラエティ感があるの」  
「彼女は客寄せパンダか」  
「そういうこと。ちゃんと帰してね。店の外で手出しちゃダメだから」  
旬果は二人の会話を聞いていたが、久々に外の世界を歩けることに気分が良く、カテリーナの言う事はどうでも良かった。  
それに、睡眠薬を飲まなくても眠れるようになっていた。  
リヴィアの一軒家を出る車はネイサンが運転するものだ。  
車種には詳しくないが、日光を受けて黒光りしている。良い車なのだろう。  
「ありがとう、ネイサン」  
「まだどこにも連れてってないが」  
「良いの、外に出れるだけでも嬉しいから」  
「そう言うと、ネイサンは旬果のかぶっていた麦わら帽子を深くさせる。」  
「日焼けしたら大変だ」  
「ちゃんと対策してるから、大丈夫」  
車に乗って、シートベルトをつける。  
フロントガラスから見える世界は色鮮やかだ。  
街を離れてリグーリア海岸へ。時間的に、ランチをして海を歩き、帰れば良いころだろう。  
あまり遊んではいられないが、仕方ない。  
美しい青の水平線。  
さすがに観光地なだけあって人は多い。  
オレンジ色のシャツワンピースに白のサンダル。旬果は自前の服をようやくイタリアで身につけた。  
店で支給される衣装はよほど高級だが、旬果は安くてもこの方が気に入っている。綿の生地が潮風を通すのが気持ち良かったのだ。  
土産物が並ぶ店先を歩き、ランチを取る。  
ベターにスパゲッティを選んだが、新鮮な海鮮とオリーブの相性は素晴らしく、あっという間に食べきってしまう。  
こんなに美味しいと感じたのは久しぶりだ。リヴィアに拉致される前以来かもしれない。  
ドライブが趣味というネイサンは、色んな店を知っていた。  
海沿いを歩き、観光客とぶつかってネイサンと距離が近くなる。  
何度も肌を重ねたとはいえ、ただのデートは初めてだ。  
今更ながら「ときめいた」。  
(もし出会い方が違ってたら……)  
彼を好きになっただろうか。  
はぐれないように、と差し出される手を取り、指を絡めて握る。  
自分の居場所を見つけたような安心感が満ちた。  
自分のことを話せば、どうなるのだろう。  
手のぬくもりを感じながら、そんなことを考えていた。  
陽が落ちる前に帰らなくてはいけない。来た道に戻る途中、ネイサンが口を開いた。

「君はなぜイタリアに来たんだ？」  
「……旅行に」  
「観光なら、こういった場所が合っていたんじゃないか？モンテ・ルチェは……寂れてるだろ？」  
「劇場があるでしょう？そこに行きたかったの。バレエをやっていたから、興味があつて」  
「丘の上の？」  
「そう」  
「バレエか……納得した」  
「どうして？」  
「体が柔らかい」  
「……そうね、確かに、知ってるわよね」  
後ろから突かれ、猫のように背を反らす。かなり曲がったはずである。  
駐車場についたが、誰もいない。  
車だけがぼつんとあつた。  
ネイサンが車に向かって歩いていくのを、旬果は見た。  
広い背中だ。少し汗がにじんでいる。  
思わず唇を舐めた。  
どきどきと鼓動が鳴って、彼が振り返り目が合うと耳に膜でも張ったかのように感じた。  
ネイサンが振り返り、夕陽のような目が捕らえてくる。  
喉が渴いた気がした。  
体が奥から熱くなり、汗ではないものが滲んでくる。  
「どうした？」  
「私……ねえ、どうしよう……」  
陽が傾き、影が伸びていく。  
旬果は喉が重くなったのを感じながら、シャツを開いていった。  
白のレースのブラが出て、ネイサンの視点がそこに落ちる。  
「……私……変、なの？」  
店で支給される、甘酸っぱいドリンクを口にしていけないのに、もう欲情している。  
「ジゼル」  
咎めるようにネイサンは言ったが、その名前は旬果には「パスワード」のようになっていた。  
体の奥のスイッチがオンになる。  
ショーツが濡れた。  
  
ボンネットにお尻を乗せ、ネイサンの愛撫を受ける。  
後頭部を支えられ、首の太い血管に沿って舌でなぞられると、ぞくぞくと体に官能が走る。  
(どうしよう。いやらしい、私……)  
背に回されたネイサンの手が、器用にシャツの上からブラのホックを外した。  
カップから乳房が溢れ、西日に照らされて白く輝く。  
鎖骨から柔らかい乳房に、それと敏感な乳首にやや性急な口づけが落とされた。  
いつもよりきつく、いつもより激しい。体はネイサンの興奮を感じ取り、喜びに熱く燃える。  
脚を開けば、まだショーツを穿いているのにちゃぱっと愛液の溢れる音がした。  
「濡れてるな」  
と一言が耳にかかり、旬果は体を跳ねさせる。  
ネイサンは指でショーツをずらし、ぬぼっと音を立てて中に入ってくる。  
「こんなにか？ 思った以上だ」  
「ねえ、どうしよう……早く欲しいの……」  
自分でも今まで聞いたことがないくらい、甘ったるい声だった。発情期の猫よりひどいのではないだろうか。  
「たりない……っ」  
ネイサンの指では届かない。奥の奥、体の中心に官能の渦が出来ている。  
そこから淫らに蜜が絞り出されていた。  
もう泣きそうなくらいに耐えられない。  
彼と目が合うと、思わず口にしていた。  
「ネイサン……ねえ、好き……」  
彼に惚れるな、というリヴィアの忠告なんてとうに忘れていた。  
それに、ネイサン自身も眉を顰めてしまった。  
「ジゼル。ダメだ」  
ネイサンはそう言葉では言いながら、体に染みいるような声音で言う。  
いよいよ旬果は泣き出してしまった。  
「どうして？だめ？」  
「君が傷つく」  
「そんなずるい言い方しないで。嫌いなら嫌いって言って。優しくしたくせに、なんで突き放すの？」  
「嫌いなわけ……俺だって君が欲しいんだ。……分かるだろ？」

ぐん、とジーンズ越しの高ぶりが秘部に押し当てられ、旬果は「あっ」と声をあげてしまった。

慌てて口を押えるが、周囲には人の気配すらなかった。

「ジゼル……」

目を閉じていると、カチャカチャとバックルを外す金属音が聞こえてくる。

うっすら目を開ければ、潤んだ視界の中でネイサンが剛直したモノを取り出し、旬果の脚を開いたところだった。

「……」

思わず息を飲む光景だ。こんなに太いモノが、なぜ入るのだろうか？

まさか外で、正面から、顔が見える明るさで、こんな事を。

旬果は今更淫らになった自分を恥じた。

ボンネットに体を預け、両腕で顔を隠す。

「挿入るぞ」

はっ、と息が出た瞬間、ネイサンのモノが一気に中に入ってきた。

「……！」

声にならない声が出て、体中がびくびくと震えた。

「……いったのか？」

「ん、ん……っ」

返事にならず、頷く。

柔軟にネイサンのモノを包んで、また締めて、体中は歓喜に震えているのにまだ欲しがっている。

「……ごめんなさい……っ、止まらないの……！」

勝手に腰が揺れ、彼を追い詰めていく。

赤くして快楽にゆがむネイサンの顔を見ると、また中から淫蜜が溢れてしまう。

彼の首すじにそって、汗が流れる。

腕を伸ばして縋り付き、一緒に倒れ込むとその汗を舌ですくった。

ネイサンがびくっと反応し、中でモノが跳ねるように動く。

「ああっ……」

たまらず出たようなネイサンの喘ぎ声に、頭がおかしくなりそうだ。

のどぼとけに吸い付いて、首から抱きしめる。

「ネイサン、好き……好き……」

やはりおかしくなってしまったのか？

旬果は目の前にいる彼が愛おしくてたまらないのだ。

快楽を与えてくれたから？

守ってくれたから？

優しくしてくれたから？

不安が原因だったのだとしても良いような気がしたその瞬間、彼のモノが中で膨れ上がる——

「ジゼル……っ！」

「あ……！！」

ぶるっ、と全身が震え、二人で果てる。

余韻を味わっていると、ネイサンが激しく唇を求めて来た。

「……だから明るい場所で顔を見ながらは……危なかったんだ」

「……どうして？」

「君が可愛いすぎるから、イクのが早くなる」

ネイサンは旬果の顎を撫でさすり、瞼に口づける。

「君の目が好きだ。……なあ、ジゼル。君は誰だ？」

「……私……私は……ただの、バイヤーよ……」

急激な眠気に、旬果は目を閉じた。

バイヤー。

ジゼルは確かにそうだった。

だが、バイヤーにも色々ある。宝石もそうだ、映画などのメディアもある。

すぐに「アート」と結びつけるわけにはいかないだろう。

だがもしそうなら、とネイサンは思った。

レオナルドに忠告し、その後「オテル・パラディソ」の宿泊客が失踪したという届があったが、もみ消されたという報告を得た。

ネイサンは街はずれ、海に近いそのホテルに向かった。ここはクラネ・ジェーロの影響を受けておらず、古風な雰囲気独特な穏やかさを保つ場所。立地は悪いが、静かに過ごすには良いホテルだ。

ネイサンもこの喫茶スペースをよく利用していた。

「おや、久しぶりだね」

と、支配人はネイサンを迎え入れた。

ロマンスグレー、眼鏡に、ハリのあるベストを着こなす老紳士だ。

「客が姿を消したと聞いたんだ」  
「2か月くらい前だよ。日本から来たお嬢さんで、警察に届け出たら一週間後には『帰国したらいい』と言われたんだよ。無事なら良いんだけど、礼儀正しい子だったし、何か変だと思ったけどねえ」

「……女性？」

「ああ。日本人は若く見えるから分からないよね。多分20歳くらいさ」

ジゼルは20代半ば～後半という感じだ。

「20歳……なら違うのか」

「どうかしたかい？」

「いや。知り合いかもしれないと思って」

「写真は？」

「いや」

リヴィアに厳しく禁止されている。

「黒髪で、長さはこのくらいだ」

ネイサンは肩あたりをさした。支配人はうーん、と唸る。

「お客のお嬢さんはね、肩甲骨くらいだったな。でも、髪は切れば短くなるから」

「ああ……もしかしたら、可能性は、あるよな。支配人、もし「パニー」、もしくは「ジゼル」

が来たら、何か聞き出しておいてくれ。もしあなたの客なら俺か、警察ならレオナルド・ロッシに連絡して欲しい」

「名指しなのかい？」

「警察にも裏切者が」

「厄介だね。いつの世もそういうものか……」

支配人の淹れたコーヒを飲みながら、テレビに目を移した。

ここでは時々古い映像を流している。

映画、ドラマ、音楽ライブ、と様々に。

この日はバレエの映像だった。

そういえば、ジゼルは「バレエをやっていた」と話していた。

「バレエか……」

女性が踊っているが、どんなものかネイサンには分からない。バレエには詳しくないのだ。

映像の中、突然彼女は錯乱したようになり、ついに剣を手にするが、それに触れることなくその場に倒れてしまう。

周囲の者が駆け寄ったが、彼女は起きる気配がない。

「死んだんだよ。そして彼女は精霊になるんだ」

「精霊？」

「結婚前に死んだ乙女は精霊となり、森の女王の元で暮らすのさ。そして森にやってくる裏切者の男を踊り狂わせ、ついには命を奪う存在となる。ヒロイン以外はね」

「どういう話なんだ」

ネイサンが映像を見ながら言うと、支配人は笑って言った。

「ジゼルだよ」

映像の中で踊る人物は、あまりにカメラが遠いため顔もはっきり分からない。

だが濡れたような黒髪、ダイヤモンドのように強く光る目の輝きがとても印象的である。

ジゼルと初めて会った時に感じたものと、同じものをそこに見た気がした。

哀れな乙女・ジゼル……彼女を愛した二人の男。

一方は彼女への独占欲から、一方は嘘をついた不誠実な態度から、結果としてジゼルを追い詰めてしまう。

だが後者はジゼルを愛していた。身分を捨てても良いと思うほどに。

ネイサンはローアジ・デッラ・レジーナに訪れ、ジゼルとVIPルームに入っていた。

奇しくもこの夜、森をイメージした部屋だ。

シャンデリアこそ飾ってあるものの、壁紙は暗い緑で、天涯には造花の緑と花が下げられている。

木製の調度品が置かれ、おとぎ話の空間みたいだった。

ジゼルはあれから我を取り戻したようになり、ネイサンの前で敬語に戻っていた。

あれだけ甘く愛を告白したのに、つれない態度だ。

部屋に合う白い古風なドレス。古い花嫁のようなそのドレスはジゼルによく似合っていた。

それに巻いたウィッグか、エクステのためにいつもよりロングヘアで、少し幼く見える。

まさしくおとぎ話に出てくる乙女のようなだ。

だが彼女の目はネイサンを誘うブラックホールのように瞳孔を広げていた。

やはり娼婦らしい娼婦ではなく、訳ありなのだろう。

危険な場所に囚われ、自由をなくしてネイサンに保護された形だ。

これは恋と言えるのだろうか？

危険だ、とネイサンは思ったものの、彼女の側にいるだけで心が慰められた。

彼女の肌に触れ、彼女を満たし、隅々まで愛するのは自分だけが良い、と思うほどに。

「リヴィアに怒られたか？」

「いいえ。バレませんでした」  
「それは良かった。完全犯罪だ」  
「ふふ」  
「ジゼル……ジゼルは彼を許すんだろう?」  
「え?」  
「バレエの話だ。彼女を愛した男を許す……裏切ったのに」  
「裏切ったのは、追いつめられたから……ジゼルを利用したわけじゃないですから」  
「かもしれないが、やるせないな。君ならどうする?俺が嘘をついていたら?」  
ジゼルは上を向いた。  
「うーん……理由によるかもしれません」  
「たとえば?どんな理由なら許す?」  
「正義のためとか?」  
ジゼルの言葉にネイサンは一瞬だけ息を止めた。  
「私利私欲のために誰かを利用したんじゃないなら、許せるかもしれません」  
「……彼はジゼルを愛したんだよな」  
「きっとそれが伝わってたの」  
「そうなら……良いが」  
「そうならどんなに良いだろう。」  
ネイサンはジゼルとの最初の出会いを思い出していた。  
最初に彼女を見たとき、その目の奥に深い悲しみと孤独を感じた。  
その美しさだけではなく、何か訳ありな雰囲気があるのがネイサンの心を捉えたのだ。  
職業的直感というやつかもしれない。  
一目ぼれという言葉では片付けられない、もっと深い感情がそこにあった。  
彼女を守りたいという強い衝動、そして彼女に触れたいという情欲が混ざり合い、複雑な感情  
となつて彼を支配していた。  
だがそれだけが彼女と会う理由ではなかった。  
今夜、ネイサンはVIPルーム全てを見たことになる。  
ジゼルと過ごすため、それももちろんあるが、「絵」を探しての事でもあった。  
いや、最上級だけは入れていない。あそこはアウグスト専用の部屋だ。  
だがそこに絵があるなら、彼はとっくにパスワードを得たことになっているはずだ。  
ならばありえない。  
そんなことを考えていると、ジゼルは微笑みを浮かべて見つめて来た。  
「?」  
「私の趣味に付き合ってくれたなら、私も、と思って。ネイサンの趣味って何?」  
「ドライブだよ」  
「他には?」  
「運動は……趣味というより、必要だからだしな。仕事も楽しんでやってるから……困ったな、俺には趣味らしい趣味がない」  
「そうなの?」  
ジゼルの細い腰を抱いて、床にそのまま寝ころぶ。  
彼女の髪の毛の香りがした。  
かいていると落ち着く。  
ジゼルを半分……それ以上かもしれないが、利用している。  
絵を探すために。  
もし彼女を保護対象と思うなら、Sexなどしないだろう。欲情に負けているのだ。  
彼女に惚れているから?  
そのアーモンド形の目を見ながら、思わずつぶやいた。  
「愛なら良い」  
「何が?」  
「……ジゼルと彼だ」  
「……少なくとも、ジゼルには愛です。だから彼を許した」  
「……そうか」  
腰をくすぐると、ジゼルはきゃつと声をあげて笑った。  
それがいつしか甘い吐息に変わっていく。

汗でしっとりする彼女の肌を撫でる。  
ネイサンは寝ころんだまま、自分の上で腰を揺らすジゼルを見ていた。  
頬は赤く、目はとろんとし、花びらのように色づいた唇から息が漏れ、舌先がのぞく。  
彼女は体の中で、最奥をなぞるようにしてネイサンのペニスを味わっていた。  
波打つ髪が乳房を隠し、それをのけようとすると乳首に手がかすめ、ジゼルは背をのけぞらせた。  
可愛い、淫靡な、美しい精霊。  
部屋と衣装のせいで、今夜が終われば彼女との逢瀬が終わるのではという気持ちにさせた。  
朝には消えてしまう儂い存在。

体を起こして色づく乳首を吸うと、ジゼルは背筋を伸ばして声を出す——あまりに淫らな響きに、ベニスはまた大きくなった。  
狂い死ぬまで踊らされる。  
裏切りの代償は重い。  
だが、彼女を裏切るなど。  
そんなことがあるわけがない。  
リグーリア海岸で見た、太陽の下のジゼル。  
その無垢なまなざし、笑顔。  
あれが彼女の真実の姿なら……ネイサンは愛を誓える。  
ネイサンは全て終わらせ、ジゼルに告げようと決めた。  
自分のことも、なぜここにいるかも。  
そして叶うなら、一緒にいよう、と。

リヴィアはモナコに戻っていた。パソコンのモニター越しに、彼女の部屋が見える。  
全体的にアイボリーの壁紙。大理石の柱にまきつく金の蛇。  
ラグは涼し気なグレーで、ソファの両隣には花のランプシェードの間接照明。  
そして部屋の壁にはあの「ベアトリーチェの絵」……。  
「そろそろアウグストが会議を開くのよね。カテリーナのサポートをよろしく」  
リヴィアの声ははきはきとしていた。もうすぐ彼女は目的を果たせるかもしれない……そんな局面にいるのだ。  
アウグストが持っているノートパソコンを開き、その情報をUSBに移す。これで完了。  
リヴィアはアウグストと肩を並べられる……とのことだ。  
「なぜ情報を盗むのですか？」  
旬果は聞いた。素朴な疑問だった。  
するとリヴィアはフンと鼻を鳴らす。  
「彼をおもちゃにするためよ。決まってるじゃない」  
「え？」  
旬果は聞き返してしまった。意味が分からない。  
リヴィアは髪をかきあげ、旬果に言い含めるように話をつづけた。  
「男なんて信用できない。おもちゃにするくらいが良い所。カネを稼いだら貴金属を買いあさってためておくのよ。客はそのために利用すれば良いだけなんだから」  
その言い様。旬果は気分が悪くなり、眉を寄せた。  
「人をそんな風に言うなんて、虚しい人」  
旬果がそう言うと、リヴィアは眉を吊り上げる。  
「ずいぶん生意気な口をきくようになったのね。あなただって性欲処理のおもちゃにされてるだけじゃない。目的をはたすか、おもちゃに飽きたらあなたを捨てるわよ。娼婦が本当の恋人になれると思う？甘いよ、一度地獄に堕ちたら二度と地上へは戻れないわ」  
そう言うってカップを口へ運ぶ。後をついだのはカテリーナだ。  
「これでもリヴィアも、私も、アウグストを気に入ってるのよ。3人で楽しみたいだけ。彼の身の破滅は望んでないから、情報だってゲームの一種。気楽に考えてよ」  
「ゲーム？ マフィアが持ってる情報って、犯罪と今まで被害に遭った人達のものでしょうか？」  
声荒くなったが、旬果は取り消す気にならなかった。  
二人の目が鋭く旬果をにらみつけ、最後に笑った。  
「世間知らずのウサギちゃん。だからバニーなのよ。簡単に食べられちゃうんだから……ネイサンに惚れたの？かわいそうに。気になるならネイサンを試してみれば？男なんて皆クズよ。多少マシなのをこっちが食べれば良いだけの」  
「そんなこと……」  
「ない？見てれば分かるわよ。ねえ、汚れた体で男が納得すると思って？いい加減にするのね、バニー。被害者だなんだっていうけど、危険なの知って近づいてきたのは向こうなのよ」  
「無関係の人だっているわ」  
「どこによ？」  
「ここよ！」  
旬果は自らを指した。  
するとリヴィアは思い出したと言わんばかりに頷く。  
「そういえばそうだった。あんまりお店に馴染んでいたら、忘れてたわ。けっこう楽しんだんじゃないの？」  
「……街で露頭に迷った人達を見た？あなた達が眨めたんでしょ？」  
「見たわ。ちゃんと彼らにも原因があるわよ。私たちだけが悪いって言えるのかしらね」  
「……もういいわ」  
旬果は席を立った。  
背中にリヴィアとカテリーナの笑い声が聞こえてくる。  
「もう一連托生なのよ。あなたが警察に逃げ込んでも、あなたももう同罪なの。私の店で働いた



ならマフィアの一員よ」

「バカね、バニー。ここで私たちと大人しくしているなら、短期間でお金を作れるわ。何も心配することないのに」

旬果は腹が熱くなるほどの怒りを感じたが、かろうじて涙をこらえる。  
(ノートパソコンを手に入れたら、私を解放すると言った……それはきっと嘘だわ。どうして今まで気づけなかったのかしら。私が逃げないために店での画像を世界に公開すると言うくらいよ。そして売春をした私も同罪。お金をもらっている。彼女からは逃げられない……)

彼女の言う通り、もはやここは地獄なのだ。旬果は今の今まで気づけなかった。  
リヴィアに見えない足かせをつけられたことに。

その夜、ネイサンが店に訪れた。

旬果はすぐに「話したいことがある」と告げ、ネイサンは神妙な顔つきで頷いた。

最初に入ったVIPルーム。

ネイサンが「ジャミング」とやらをするのを見届け、ソファに座った。

膝の上で手を組んでいると、ネイサンの手がそれを包む。

温かくて大きな手だ。触れているととてもほっとする。

異常な空間にいるせいで、感覚がおかしくなっているのかもしれない。

彼に恋をしている。

だが、それが本心かどうか分からない——だがそれしかするものがない。

「リヴィアはクラネ・ジェーロのカポの……ノートパソコンを狙ってるの」

ネイサン目が力強さを増した。

射貫くような眼光に、旬果は体をすくませたが続けて話す。

「そこにある情報を盗むって言ってたわ。カテリーナが実行するんですって。USBにコピーするって……」

「本当か」

ネイサンの声は固い。緊張感が増した。

「ええ。私にもそれを手伝って……お願い、ネイサン。自分のことばかり考えてるの、分かってるけど、ここから出たいの。アウグストはあなたのカポなんじゃない？」

言葉がうまくつながらない。喉が苦しくなってしまった。

「ああ。落ち着くんだ、ジゼル」

「カポの情報を守ったから、自由にして欲しいの。警察にも言わない、こっそり日本へ帰して。

それがだめなら、あなたのところにいさせて」

「ジゼル、大丈夫だ。リヴィアは君を「金脈」と話していた。手放すことは出来ないと言っていたが、彼女が納得する条件があるはず。ノートパソコンの話はちゃんと伝えて、便宜を図る。もう少しだけ、耐えて欲しい」

ネイサンは肩を抱いて、胸にもたれかけさせた。彼の鼓動が聞こえる。

「いつまで？」

「もう少しだ。もうじき特定出来る。そうになったら、早く終わる」

それだと、はっきり約束にはならないのだ。

旬果は深く息を吐きだした。その時、ふとリヴィアの言葉がよぎる。

——ネイサンに惚れたの？かわいそうに。気になるならネイサンを試してみれば？男なんて皆クズよ。

まさか。

ネイサンは優しい。恋だとかは置いておいても、彼は少なくとも彼自身以外からは守ってくれた。

だがその結果、リヴィアはますます旬果を手放さなくなったのではないか。

アウグストの右腕。その彼が関心を寄せる旬果は、リヴィアの手駒だ。

嫌な考えを吹き飛ばすように頭をふり、無理に笑顔を作るとソファに座り直した。

「……だったら、あなたを信じる。そうだ、そのお礼になるか分からないけど、あなたが探していた絵、どこにあるか分かったかもしれないの」

振り返ってネイサンを見ると、今まで見たことがない顔をしていた。

目を見開き、アンバーの目が輝く。

旬果の方が驚いてしまうほどの変わりようだ。

「……どこに？」

ネイサンの声はわずかに震えていた。

絵はモナコのリヴィアの家に。

そう伝えた翌日から、ネイサンは店に現れなくなった。

ネイサンがモナコに入ったのはジゼルから話を聞いた、翌日だ。

仕事で呼ばれているとアウグストに報告し、レオナルドと合流すると地元の花屋に協力を仰いだ。

大量の花束を買い、リヴィアが住む高級マンションへ入る。

管理人が挨拶し、ネイサンとレオナルドは愛想よく返した。  
その時花屋の制服であるエプロンと帽子を借り、エレベーターにのって最上階の21階へ。  
白を基調とした壁、廊下はベルベットのカーペットが一枚で敷かれており、照明はいずれも控えめな大きさ、しかしLEDの明るいアンバー色が空間を華やかに演出していた。  
「クソ、やばい仕事してる奴がこんな良い所に」  
レオナルドが愚痴をこぼした。  
運搬用のワゴンには段ボール、そして大量のユリの花束。  
「まあ、いい。ここから転落したら怪我どころじゃすまないからな」  
「悪事はいずれバレるんだ」  
「しかしよく分かったな、ここに絵があるなんて」  
「協力者がいるんだ」  
「へえ。俺もそっちを学べば良かった」  
「今回は誉められた形じゃない」  
「そうかよ、まあ、結果オーライだろう」  
すでに防犯カメラの設定は済んでいる。  
リヴィアも今はイタリアへ戻っており、この部屋には誰もいない。  
レオナルドは素早く鍵を差し込み、開けた。  
「良い手つきだ」  
「まあな。こういう細かいのは得意なんでね」  
室内に入り込む。  
中は香水と花の香りで満ちていた。まさしく女の園といった感じで、男の気配は一切ない。  
なのにどこか淫靡な気配が漂っていた。  
「ここで遠隔3P。やるな、アウグストも」  
アウグストは直接リヴィアと関係は持たず、カテリーナとの情事を見せつける形でリヴィアの痴態を楽しんでいた。  
いや、正確には、アウグストはそのリヴィアの姿を幹部に見せることで、自らの支配権を誇示しているのだ。  
かつての高級コールガール。今や幹部で、売春の城の女王を下している、と。  
「さて、絵は？」  
「あれだ。部屋のど真ん中」  
ネイサンが指し示す先に、金箔で飾られた女性の絵。大きさはおよそ90×60。  
ダンテの永遠の理想の女性、ベアトリーチェを描いたもの。  
ベアトリーチェは女神か天使のようだ。見る者を優しく迎え入れるような微笑みを浮かべている。隠された名品とされ、絵画としても美しい。それがマネーロンダリングの対象となり、さらには犯罪の証拠を隠すものとして使われたとなると残念だ。  
「彼女が悪を暴く女神になってくれた」  
とレオナルドは明るく言った。  
「……それもそうだな。ところでこれを買ったというアジアのバイヤーはどうなったんだ？」  
ネイサンは絵を外し、裏を確認した。どこかにパスワードがある。  
「悪い。捜査中なんだ、どうにもすでに帰国済み、と書かれてあったそうだが、飛行機に乗った形跡はない。船もな」  
「ならまだ……」  
「イタリアにいるかもしれない。殺されてなきやいいが……」  
指でたどり、ラテン文字と英語の文字の羅列を発見する。  
「これだ」  
いよいよパスワードが見つかった。  
これがクラネ・ジェーロの情報全てを網羅した、ノートパソコンのパスワード。  
そしてノートパソコンさえ手に入れば、組織解体につながる。  
ネイサンは邦人が関わった武器密輸の証拠を手に入れ、日本へ帰国できるのだ。  
その時、ジゼルがただ巻き込まれただけならば、一緒に連れ帰れるだろう。  
ネイサンはカメラで撮り、絵を戻す。レオナルドは特殊スマホで撮影、すぐにデータを送ったようだ。  
やりきった感覚に頭が沸き立つが、油断は禁物である。息を整え、ユリをワゴンにしまおうと蓋をする。  
エレベーターに乗っており、管理人と再び顔を合わせた。  
丁寧な挨拶を受け、ドアが開かれる。  
花屋の車に乗り、しばらく走って林道から車を乗り換える。  
予期しない出来事が起きたのは、この時だった。  
狙撃されたのである。

あれから一週間が経つが、やはりネイサンは現れなかった。  
(裏切られた?)  
そんな考えばかりがよぎり、体は小刻みに震えて止まらない。

彼はどれだけ離れても、4日以内には顔を見に来た。  
絵のことを話したから？  
あの時、明らかに目の色が変わっていた。  
——あなただって性欲処理のおもちゃにされてるだけじゃない。目的をはたすか、おもちゃに飽きたらあなたを捨てるわよ。娼婦が本当の恋人になれると思う？甘いよ、一度地獄に堕ちたら二度と地上へは戻れないわ  
リヴィアの言葉が胸に蘇り、脳に刻まれ、離れない。  
涙すら浮かばなかった。  
(どこで間違えたの……)  
ネイサンに期待した自分がバカだったのだろうか？  
アートが人の欲望を刺激し、狂わせるのを見て来た。  
ネイサンがそういう人だとは思わなかったが、だが、あの目だ。  
はっきりと開かれた目には、爛々としたものが含まれていた。まるで獲物を見つけた狼のように。

彼の目的は絵だった？

——ジゼル。絵を知らないか？金箔で飾られた女性の絵だ

——探しているんだ。この店かどこかにあると聞いて

——欲しいと思って。かなりの名品で、しかも作者不明の珍品だと聞いたんだ。事務所に飾れば、顧客の目を楽しませられる……いや、気にしないでくれ

彼はそう話していた。熱心だった気がする。ピロートークには似つかわしくない話題。  
Sexの後には本音が出やすい時間と言われている。  
彼は旬果を労わったが、その後すぐに絵のことを。  
「やっぱり、そうなの……絵が欲しかったの……」  
彼が店に通っていたのは。  
簡単だったはずだろう。旬果は娼婦としてはずぶの素人で、恋愛にもすら奥手だ。  
ちょっと優しくすれば靡く、利用するにはお手軽な、弱々しいウサギだったのだ。  
旬果は気持ちが冷え込んでいくのを感じ、項垂れた。  
(それでもいいわ。少なくとも、彼は守ってくれたし、もう充分なのかも……)  
そうごまかしながら息をする。  
(これからどうしたら良いの？)  
旬果は一向にまとまらない頭が、どんどん重くなるのを感じていた。  
ぼーっとしたまま、客が去った後のテーブルを片付ける。  
中央のステージではストリップ。  
下着が一枚一枚取り払われ、ショーツが降りるとワーッと歓声が上がった。  
不思議なことに、客には女性もいる。彼女たちもこの異様な空間を楽しんでいるようだ。  
どれもこれも、異空間に見える。何も聞こえない。  
めまいがする中、突然視界が真っ暗になった。  
「どうした？」  
「おーい、電気が消えたぞー！」  
停電だ。  
非常灯がつき、店内は見えるようになったが、先ほどより薄暗く、赤い照明がなくなって淫靡な気配は薄れた。  
音楽も鳴りやんで、客とスタッフのざわめく声だけが響いている。  
「ジゼル」  
ネイサンの声が聞こえた気がする。  
幻聴ではなく、胸が記憶している声。  
——ジゼルは彼を許すんだらう？  
そう、許す。彼女には愛があったから。彼の真心を信じたから。  
「……」  
旬果はトレーを置いて、ステージに登った。  
ゆっくりとつま先を立て、歩く。客のざわめきが静まり、旬果を見た。  
中央につくと腕を広げ、胸の前で交差させると同時に膝を曲げる。  
ぴたりと静かな空気が流れた。  
店には不似合いな優美な動き。  
思い出せる限りの振付で、旬果は失意に沈む彼女を演じた。  
リズムを失って踊り乱れ、やがて手を伸ばして何もつかめないまま動きを止める。  
その場に膝をついて、深く項垂れた。  
客席からは拍手が起こり、旬果はようやく息を取り戻す。  
そう。ジゼルは許した。  
彼が愛をくれたから？

ジゼルの本心は分からないが、一つだけ確かなことがある。  
彼女は確かに、彼を愛したということだ。

それを見ていた者がいた。  
クラネ・ジェーロのカポ、アウグストである。

モンテ・ルチェには、ロッカ・ディ・ルチェと呼ばれる古城がある。  
そこは要塞として建てられたもので、ロマンティックなお城ではない。山の中腹に立てられた  
武骨なもので、切り出された石を積んで作られた壁はまさしく「見るものを寄せ付けぬ」もの  
だった。

その地下部分こそクラネ・ジェーロのアジトであり、大広間は会議場となっていた。  
あろうことか、旬果はそこに呼ばれたのである。  
他の客は取らなくて良い、そう言われたはずだ。  
だが事情が異なっていた。相手はクラネ・ジェーロのカポ……絶対的支配者のアウグストなの  
だ。

リヴィアもネイサンも断れない話なのだろう。  
店の外で流石に下着同然というわけにはいかない、旬果は自前の白のワンピースを着て、プロ  
レスラー体型でスキンヘッドの男が運転する車に乗せられ、ここに入った。  
中はかろうじてレッドカーペットが敷かれているが、石の床である。どこか冷たく、寒々し  
い。

大きく開かれた窓、石の柱の間から見える外の景色。

街を一望できる立地だった。

正しく支配者に相応しい城である。

「厄介なことになっちゃったなあ」

運転手である男——ヴィットリオが言った。

外見は怖そうだが、話し方はいたって気さくだった。

「厄介？」

「ああ。カポに目をつけられてさ、あんた大変だ」

「……どうして？」

「どうして？ネイサンの恋人なんじゃないのか、あんた」

ヴィットリオは意外なことを言った。

恋人？

「まさか。私は……娼婦なのに」

「だから何だよ。惚れた女の前職なんかどうだって良いんだよ。大事なのは、ここ、ここ」

ヴィットリオは自らの胸を指さし、旬果に笑って見せた。

旬果はその気さくさ、人間臭さに目を見開き、急に現実に戻った心地になった。

今までは、半ば自暴自棄になっていたというのに。

「でも、どっちにしても……恋人じゃない」

「なんで？あんたを気に入ってたら、あいつ。あ、分かった。あんたが断ってるのか。あいつの  
情婦にはなりたくないって。だからカポに乗り換える？そんなタマには見えないが、人は見た目  
に寄らないしな」

「……変なことをおっしゃるのね。ネイサンが私を気に入ってる？違うわ、彼の目的は絵だっ  
た」

「絵ね。確かにあれは大事だ。あれがなきゃ困る」

「ほら。やっぱりそう。絵のために私に近づいたの……だまされた私も悪いけど」

「だまされた……？ ああ、あいつ、話してないのか。そりゃそうか」

「え？」

ヴィットリオの言葉が変だ、旬果が訊き返したその時、クラネ・ジェーロの幹部が窓をノック  
した。

「おい、着いたぞ。降りろ」

「へいへい」

ヴィットリオはドアを開け、旬果も幹部により外に出される。

周囲は皆マットブラックのスーツ姿。かなり威圧感があり、その中に見知った金髪を見つけ  
た。

カテリーナだ。白のミニスカートからガーターストッキングが見え隠れしている。

彼女は旬果を見ると、顎をつんと持ち上げ勝ち誇ったような笑顔を見せる。

「カポがお呼びよ、上手くやったじゃない。二人で寝室に入れるわ」

「どういうこと？」

カテリーナは顔を寄せ、耳打ちをする。

「ここ、アウグストの別荘を兼ねてるの。それにセキュリティもしっかりしてるわ。だって要塞  
だもの。入口は迷路になってて、いくらでも罫を仕掛けられる。警察だって簡単に入れないか  
ら、あのノートパソコンはここに保管されてるのよ」

「……そう」

もはや旬果は興味をなくしていた、  
それを得たところで、旬果に自由はないのだろう。  
「アウグストは上手いから、いっぱい可愛がってもらって。その隙にデータを盗んでおくから。  
今日は何回イけるかしら……二人だからいつもの半分？私にも彼のペニスと精子、残しておいて  
ね。彼の熱い精液を奥に浴びるのが好きなの」  
あまりにストレートだ。彼女の下品な物言いに旬果は彼女を睨みつけた。  
「まあ、怖い」  
カテリーナはふふんと笑って背を向けた。

「ネイサンがいないな」  
冷たく腹に落ちるような声が大広間に反響するようだった。  
大広間、大理石のテーブル。背もたれの高いベルベットの布張りの椅子に座った男がアウグスト。  
一度店で見て、旬果はすぐに彼を覚えた。  
彼はプラチナブロンドの髪、薄い青の目を持つ整った顔立ちの人物だ。その豹を思わせる体つきに油断のない目つき。  
誰もが一度見れば忘れられなくなるだろう。孤高の狼を思わせるネイサンと、少しだけ印象は似ているかもしれない。  
シルバーグレイのスーツはなめらかに皺をよせ、光沢の陰影を作った。かなり上質なものらしく、幹部達のスーツより際立って美しく、よく似合っていた。  
「誰か知ってるか？」  
答えられる者はおらず、アウグストはゆっくりと視線を移動させて鼻を鳴らした。  
「まあ、良い。奴の報告は後で聞くとしよう」  
月一回行われる事業報告、それと次の目標を立てる会議だった。  
爆薬を作るために建てた花火工場、マネーロンダリング、偽造カードに、パスポートと戸籍を売る代わりに外国へ逃亡する者たちの手伝い。  
並べられる犯罪の数々に、旬果はため息をつきたい気分になった。  
やがて窓からまっすぐに夕陽が落ちていく。  
会議は終了し、幹部達が帰っていく。  
後には旬果とカテリーナ、そしてアウグストが残るのみだった。  
「リヴィアの店の売り上げは順調だな」  
「バニーが人気になったわ。こないだのダンスが好評なの。それと、簡単に肌に触れられない希少性が良いんですって」  
「バニー。あのダンスの意味は？」  
アウグストの冷たい声が旬果に向けられた。  
彼の鋭い視線が絡むと、まるで”蛇に睨まれた蛙”のように感じた。  
触れられていないのに、喉が詰まるような緊張感が襲う。  
「……恋人に裏切られた女性、です」  
返事する声は掠れた。  
「ほう。君自身を表したか？」  
アウグストは頬杖をついて旬果を呼び寄せる。  
手が伸び、旬果の手を取ると手のひら同士を合わせ、指をなぞるように絡めた。  
ぞくぞくする触れ方だ。  
恐ろしいのかどうかすら分からない。  
恐怖と困惑が入り混じったような感覚の中で、彼の冷たい手だけがはっきり感じられる。。  
「小さい手だ。ステージでは迫力があったが」  
「ご覧になったんですか？」  
「ああ。たまたま暇だったのでね」  
アウグストはもう片方の腕を伸ばし、旬果の腰を引き寄せた。このままだと彼の膝の間におさまることになる。旬果は力を入れて抵抗したが、カテリーナが背をちょっと押し、気づけば彼の肩に手をかけて顔が近くになってしまった。  
細かい皺が刻まれているが、見るほど美しい獣のごとく整った顔をしている。  
幹部達の前で見せていた威圧的な気配はそのままに、紳士のような話し方、触り方をしてきた。  
旬果の二の腕を指先で撫で、往復させる。産毛が立ちあがり、そわそわと余韻が残る。  
「あの……」  
「こうしてみるとアーモンドのような目をしている。美しいな、宝石のようだ」  
頬から目元、アウグストの指が触れ、そっと降りて唇に。人差し指が唇を押し込み、口の中に入り込んできた。  
いよいよぞつとして、旬果は血の気が引くのを感じる。  
しっかりしないと気絶しそうだが、息の仕方が分からない。  
舌をなぞられ、唾液が溢れて彼の指を濡らし、顎へ垂れた。  
「は……っ」

苦しくなると、それを見かねたアウグストは指を抜いた。  
「失礼。ここに座って」

(以下アウグストとカテリーナの情事を旬果に見せつけるシーンとなります。不快かもしれないと思う方はご覧にならないように)

アウグストは椅子を引いて座り、旬果に自身の真正面に座るよう促した。  
旬果は体を震わせながら、その通りにした。  
冷えた大理石はワンピース越しでもお尻に冷たい。  
するとカテリーナがブラウスを脱ぎながらアウグストの前に跪く。  
小さいが形のよい乳房にピンク色の乳首がつんと立って、ネックレスが肌にきらめく。  
何が行われるのか、と身を固くしていると、カテリーナは慣れた手つきでアウグストの股間を撫で、ベルトを外し、ファスナーを下ろし、長く太い、黒光りするようなペニスを取り出し口に入れた。  
ずぶずぶ音を立てながらカテリーナはしゃぶりついている。顔は真っ赤で、目はうっとりとしている。  
旬果は体が熱くなるかと思えば、全身から血が抜けたような寒さを交互に味わった。  
カテリーナは甘く発情した猫のような声をあげて舐め、アウグストは旬果を見据えて離さない。

肩が震え、逃げ出したいくなった身体はかちこちになっている。  
拘束もされていないのにとても動けそうになかった。  
(見せつけられてる……)  
カテリーナは旬果の方を向くと、脚を開いてアウグストの膝に跨り、器用に片手でアウグストのモノを入れ込んでいった。  
「あーあ……っ」  
彼女の喉を通る声は悩ましく、旬果の下腹部に響くほど。  
裏筋の目立つペニスは獣のように蠢いて、カテリーナの中をぬるぬる犯していく。  
旬果の心臓が強く打ち、頭にまでドクドク音が響く。  
(なぜこんな……)  
耳を塞ぎたいと思うが、体が固まってしまい、言うことを聞かない。  
「あっあっあっ……」  
根元までペニスを飲み込んで、カテリーナはステージ上のストリップよりもよほどエロティックな腰つきを見せた。  
腰が回り、ちゅぽちゅぽ音を立てて愛液を隙間から漏らしていく。  
アウグストは額に汗をにじませながら、彼女の揺れる乳房を掴んで可愛らしいピンクの乳首を指先でなぞった。

「あっ！」  
喘ぎ声が大きくなり、ごぽっと愛液が噴出され床が濡れる。  
「欲しいか？」  
「欲しい、欲ちい。カポのいっぱい欲ちい」  
「欲張りな子だ」  
「んーんっ……もっとうっ……カポのでカテリーナの中いっぱいにしてっ」  
「出して欲しいのか？」  
カテリーナはうんうん頷いた。舌ったらずなまま腰をくねらせて悦に浸っている。  
旬果は腕を震わせた。目の前の淫らな光景に目が離せないでいる。アウグストがそれを許してくれないのだ。

彼はカテリーナを泣かせながら、彼女の肩越しに旬果をずっと見つめていたのだから。  
(怖い、怖い……。ネイサン、助けて……！)  
彼の薄い青の目は、混じり気のない氷のよう。美しいが、冷たい。  
背中に汗が伝って落ちた。息苦しく、熱いのに寒い。  
「カポ……大好きっ、せいし、いっぱい出して、カテリーナの中いっぱい犯してっ……！」  
アウグストは無感情のままカテリーナを見下ろすと、彼女の脚を広げ、膝を抱えるとぐんっ、ぐんっ、とペニスを突き立てた。

「あぁあっ！」  
激しく体を震わせ、カテリーナは絶頂した。  
小刻みに体を震わせ、ぐったりとアウグストにもたれかかる。  
ずるずるとカテリーナの愛液ごと、アウグストは自身のモノを引き抜いた。  
ぶるんっと勢いよく引く抜かれたため真っ白い興奮の証が飛び出て、旬果の足首を濡らす。  
「！」  
まだ興奮冷めやらぬそれは、ぬらぬらといやらしい液体で光って旬果を睨む蛇のように蠢く。  
思わず彼のペニスを凝視していると、アウグストは荒く息をしながらプラチナブロンドの髪を撫であげ、旬果を見据えて小さく笑い——ささやくように言った。  
「”バニー”、次は君だ」

カテリーナは髪をなでながら一步下がり、旬果に目配せした。  
アウグストの真後ろにある棚。そこにあのノートパソコンがあるらしい。  
つまり、彼女がノートパソコンから情報をコピーする間、アウグストの注意を惹きつけろとい

うことだ。  
旬果は肩を揺らして無理やりに息を吸った。

「か、カポ」

初めて使った呼び方だったが、アウグストにはちゃんと伝わったらしい。

「ん？」

そう訊き返すアウグストの声は優し気だったが、ペニスはぴくぴくと貪欲に動き、旬果を狙う大蛇のよう。

アウグストは立ち上がってジャケットを取り、ネクタイを取ると旬果の右足を持ち上げ、腿と足首をそれで縛ってしまった。

アウグストは旬果の脚を丁寧に撫でまわしながら、膝にキスを落とす。

ぞっとするものが走る。旬果は腕と腰を使って大理石のテーブルの上を逃げるように移動したが、微々たるものでしかなかった。

「ま、待ってください」

「何をだ？最初だから、多少は手加減してやる。今の内に言いたいことを言え」

「あの……わ、私……ネイサンが」

「ネイサンが？」

「ネイサンに買われてるの。彼、自分以外に触れさせたら支払いをやめるって」

実際そのようなことは言われていないが、口から出まかせだ。

しかしアウグストはフンと笑っただけだ。旬果の脚を舌でなぞり、感触を楽しんでやめてくれそうにない。

「ほう。ずいぶんご執心だな。あいつも案外普通の男だったというわけだ」

アウグストは黒のシャツを脱ぎ、見事に鍛えられた肉体を晒す。刃物傷のようなものが走る腕は血管が浮き出て、力強く脈打っていた。

ネイサンもかなり優れた体を持っていたが、違うのは、アウグストの体はどこか痛々しい感じがしたものだ。

「気にするな。あれが払わなくても問題ない」

「でも……」

「金なら用立ててやる。ネイサンに給料を払ってるのは私だぞ」

「そうですが……ひゃっ」

アウグストは旬果を押し倒し、大理石に手をついた。

もう逃げられない恰好だ。アウグストの手がガシッと旬果の左足首を掴み、ずるずると体を引っ張ってもとに戻ってしまう。

びくびく反応する彼のペニスが内腿に触れ、カッと火傷したように体が熱くなった。

怒りなのか羞恥心なのか、内なる炎で体が焼け切れそうなほど、嫌だった。

「私に興味なんて、なかったでしょう!？」

「あつたさ。初めて君を見た時に……黒いウサギ。だがネイサンが君を見初めたようだから、譲ってやったんだよ。彼は優秀な男だから、へそを曲げられても困るのでね」

「そ、それなら、……お願い、やめてっ」

「やめないよ。彼が味わったものに、興味がある。どうやって彼を虜にした？ここか？」

アウグストは旬果の胸を、ワンピース越しに揉んだ。

親指が敏感な乳首を的確にいじりだす。

だが凍り付いた体は性感をもたらしさない。鋭い痛みが走った。

「やめて……っ」

「彼を気に入っているからこそ、こうする意味もある。バニー、私の女になれ」

アウグストは旬果の首元に顔を埋め、手を下肢へ伸ばした。

はっと息を飲んだ瞬間、ひらめいた。旬果はとっさにブラに挟んでおいたものを取りだし、彼の首に突き立てる。

「!」

アウグストは体を起こすと首を押さえ、眉を寄せて目を見開き、旬果を見下ろすとその場に倒れてしまう。

カテリーナが振り返った。

「何!? えっ、カポ!!!」

カテリーナが駆け寄り、アウグストの頬に触れて声をかけた。

「どうしたの? ねえ、カポ!? あんた何をしたの!」

眉を吊り上げるカテリーナに、旬果はアウグストに刺したものをもう一つ、ブラから取り出す。

「それ……あの薬? 店で使ってる……!」

嫌な客が来た時のみ使う、即効性の特殊な麻痺剤だ。

それを注射された者は数秒で身体が麻痺して動けなくなり、その後、薬の効果が進行して眠りに誘導される。

「このクズ女!」

カテリーナの手が頬をぶつ。旬果はきつと彼女を睨みつけると、彼女の肩に麻痺剤を打った。  
「！」  
カテリーナが息を飲み、すぐにまぶたを下ろしはじめ、「リヴィア……」と名を呼ぶとその場に倒れ込む。  
裸の男女が折り重なるように倒れた。情事の後のようなのである。  
旬果はようやく深い呼吸を取り戻し、忘れていた右足の拘束を取り去った。  
このまま逃げよう……そう思った瞬間、カテリーナにより開かれた棚が目に入る。  
(あのノートパソコンは……)  
薄い、一枚の、小型のノートパソコン。  
これなら子供でも持ち運びできるものだ。これが組織の命運を握っている。  
旬果は震える手で、それに触れた。

(この麻痺剤は現実には存在しません。フィクションなので大目にみてね)

狙撃されてから10日が過ぎた。  
イタリア警察にいたクラネ・ジェーロの内通者は、アウグストではなくリヴィアのスパイだったというわけだ。  
車はパンク、レオナルドは腹を撃たれ重傷。ネイサンは腕をかすめたが、致命傷はない。  
現れたリヴィアは「レオナルドを助けたければ言うことを聞くように」と言い、従って連れてこられたのは彼女の店——「ローアジ・デッラ・レジーナ」だった。  
最上級のVIPルーム。ここに入れるのはリヴィアと、アウグスト。そして彼の愛人だけだったはず。  
室内は教会のような静けさで、どちらかといえば厳か。  
女神やおとぎ話の女性の絵画が壁に飾られ、いずれもが男性、あるいはライオンと添い寝をしているものだった。  
中央には海のように広いベッド。濃い青の重々しいベルベット生地の日蓋があり、その縁取りは金の糸。  
情事を”捧げる”ように見せるための部屋、という感じだった。  
化粧品と香水の香りに、女の肌のおいが混じった異様な空間。  
抜け出られない洞穴のような暗さに満ちていた。  
レオナルドは一時的に病院で治療を受けたものの、まだ血をにじませ額に汗を結んでいる。  
「おい、お前だけでも逃げろよ」  
二人になるとレオナルドはそう言った。  
「もう作戦決行の日は過ぎちまったぞ。ヴィットリオとの連絡も途絶えた……ヤバいよ」  
「しっかりしろ。進藤とは何とか連絡がついた。彼はヴィットリオと合流し、パソコンを追って途中だそう」  
「パスワードは？」  
「残念ながら、届けられていない」  
「……情けねえよな。俺のところに裏切者がいるなんて」  
「今追ってるんだろ？」  
「そのはずだ。弾を特定したし……」  
レオナルドは腹の銃弾をネイサンの取り出させてから、治療を受けたのだ。隠し持った銃弾はこの店から落とす、ネイサンの後輩である進藤が回収。警察内部で捜査が始まっているはずだ。  
レオナルドを置いて、どうする？ネイサンは考えた。  
ロッカ・ディ・ルチェで行われる会議、そこで隙を作り、ノートパソコンを用意したそっくりのダミーと入れ替える……それで全て解明されるはずだったが、甘くなかったというわけだ。  
そしてノートパソコンは消えた。  
ヴィットリオが言うには、「バニーが持ってる」らしいが……。  
ガチャッと重い音が鳴り、振り返る。  
ベルベットのブラックスリットドレスを身にまとった、夜の女王といった雰囲気のリヴィアがそこにいた。  
「私の家に忍び込んだ目的は？」  
抑揚のない声で彼女は言った。室内に重く響き渡る。さすがに危険な世界で一人、成り上がった女だ。威圧感が声にも宿っていた。  
「パスワードだ」  
「アウグストに命じられたの？」  
「いや。俺の判断だ」  
「へえ。そんな権限があると思って？」  
「さあな。だが盗みを働いたのはお前もだろう？」  
リヴィアは真つ赤な唇に笑みを浮かべた。  
「だから？」  
悪びれた様子もなく彼女は聞き返した。



「魔女だな」  
「仕方ないわ。こうする以外に生きる術を知らなくて」  
「怠惰なだけだろ」  
「ハハハ！生意気な口を利くのね、ネイサン。アウグストが気に入る理由が分かった気がする。ねえ、私は裏切るつもりじゃないのよ。アウグストと肩を並べたいだけなの。そのために、協力しない？」  
意外な申し出だ。ネイサンは彼女を見た。  
「あのマッテオとかいうのが残したノートパソコンに、クラネ・ジェーロの全てが保存されている……。それをアウグストと、私と、あんたの3人で分け合うのよ。そうしたらもっと勢力図を広げられるわ。いずれイタリア全部支配出来るかもね」  
「アウグストはそれを許さないだろう。彼は誰よりトップに立ちたいんだ」  
「バカよね、そんなことにこだわって。もっと楽しいことに目を向ければ良いのに。そう思わない？」  
リヴィアは銃を取り出し、レオナルドに向けた。  
「さあ、ネイサン。自分の手首にこれをかけて」  
リヴィアは手錠を差し出した。  
言うことを聞かなければレオナルドが死ぬのだから。  
ネイサンは言うとおりにする。リヴィアはそれを見ると満足そうに笑った。  
「いい子ね。さあ、次は椅子のひじ掛けにその手錠をかけて」  
リヴィアが顎で示したのは、ベッドの隣にあった古びた椅子。  
部屋に合わせた豪奢ながら清楚なもの。ネイサンはそれに座るとひじ掛けに手錠を回す。  
「鍵はここよ。意味は分かるわね」  
リヴィアは小さな鍵を見せびらかした。それを胸の谷間に流し、銃を下ろす。  
「無用な殺人は警察沙汰になるわ。だから殺人を避けようと思ったお陰で面倒くさいことになったけど、意外な拾い物でもあった」  
「何の話だ？」  
「この子よ」  
リヴィアはスマホをネイサンに見せる。音声がクラブミュージックを流し出し、この店で撮られたものだとすぐに理解出来た。  
暗い画面に映っているのは、黒のウサギ耳、黒のレースビスチェ、Tバック。薄いストッキングに、黒の足首ベルト付きのハイヒール。白の襟と手首飾りが目立つデザインの彼女のもの。  
ジゼルだ。  
拳に力が入った。  
「……まだあるの。この子コスプレが映えるわよね」  
ほとんど下着姿同然のベビードール、エプロン、カフェ店員、と様々に。  
その奥では客がVIPルームに入らないまま行為に及んでいる。  
それに、くっきりと明るい部屋での着替えでは形のよい乳房が映り、さらにはシャワー中のものであった。  
「けっこう良いのが撮れたわ。売ればなかなかお金になるかもね」  
「お前……最低だな」  
「そう？昔から女性の盗撮って、女性がしてたことも多いのよ。私に協力するなら、これ、ばら撒かないであげる。あの子の名誉を守ってあげたいでしょ？こんな世界にばらまかれたら、次のお仕事なんて見つからないわ」  
彼女はマフィアじゃない、その事実ネイサンはほっとしたが、同時に怒りがこみ上げてくる。  
「それで彼女を脅してたのか？」  
「そうよ。あの子はもう逃げられないの。かわいそうにね」  
狡猾な女だ、ネイサンは内心で毒づき、疑問を口にした。ずっと知りたかったことだ。  
「彼女は何者なんだ？」  
「日本から来たアートバイヤー。あの絵を競り落とした張本人」  
「！」  
「そして今や私の娼婦。名前は……ふうん、名刺があるわ。Shunka. Aonoですって」  
リヴィアはその名刺をネイサンの足元に投げてよこす。  
「青野 旬果……」  
彼女の本名。口に出すとしっくりくる感じがした。  
「あんたが買ったのよ。あの子を本物の娼婦にしたのはあんた。今更正義の味方は気取れないわよ」  
「そんなつもりは一切ない」  
彼女に惹かれ、欲望に負けたのは事実だ。だが恥じるつもりはない。彼女を道具と思ったことはないのだ。  
リヴィアは笑みを消し、ネイサンに近づくと赤い爪で顎を取る。  
美しい切れ長の目。エメラルドのような緑色。  
化粧が濃く、彼女もまた素顔を隠した哀れな女だった。  
顔立ちこそ美しいが、人を睨む目はムカデのように醜悪である。

「臭い女だ」

そう言い放つと、リヴィアは口元に皺を浮かべてブツと唾をはきかけた。

「クソ生意気だわ。協力する気なんてないってわけね」

話は遡るが、旬果が雨の降る朝、オテル・パラディソについたのはロッカ・ディ・ルチェでの会議の翌日のことである。

ノートパソコンを抱き、深く眠るアウグストとカテリーナを置いて大広間を出たのだ。

あの麻痺剤は、リヴィアに渡されたものだ。

店に立つと決まった日、絵の礼に、と3回までは自由に使って良いともらったもの。

お守りとしてブラに隠し入れておいたものが、ここで使うことになるとは。

たいていの女性たちは「酔わせて口でして精子を集める」ようにしているらしいが、気に入れば中出しOKとそれぞれルールを持っていた。旬果には慣れない話題だったし、ネイサンは最初の夜はしようとしなかった。

それからは彼に守られた形だったため、一つも使わないでいられたのである。

足音の響く廊下だ。音で二人が目覚めてしまうかもしれない……そうこわごわ歩いていると、前から人影が飛び出してきた。

柱に身を隠すが、明るい声がかげられる。

「おっ、あんたか！無事だったのか？」

はっと顔をあげ、ノートパソコンをワンピースの中に隠す。

ヴィットリオが顔をほころばせて向かってきた。

「早かったな。どうしたんだ？カポとカテリーナは？まだヤツてる？」

「ちょ、ちょっと、待って」

ヴィットリオは大広間に向かおうとした。旬果は慌てて彼の裾を掴んで止める。

「二人は……眠ってるわ」

「眠ってる？平和なこったな。ん？眠ってる？カポが？」

「そう。起こしたら悪いわ」

「寝るかよ、カポが！女とヤツた後はそいつらを追い出すんだから、二人でおねんねなんてありえねえ」

「え？」

やけに詳しいではないか。旬果が眉を顰めると、ヴィットリオは「シーツ」と言って旬果に顔を近づけた。

「俺は”スパイ”なんだよ」

「え？」

「ボンドに憧れてたが、まさかこんな形で叶うなんてな。俺は三下のヴィランだと思ってたけどよ。ところで、それ、まさかパソコンか？」

「あっ！」

旬果はパソコンを抱くと背中を向けた。走って逃げる前に、ヴィットリオに猫のように捕まえられてしまう。

「良いんだ。ちょっと待ってな、細工してくるからよ。それと、城の中は爆弾だらけだ、無事にいたいならここで待てる」

「何を言って……あ、ちょっと」

ヴィットリオは返事を聞かず行ってしまった。

旬果は口をぽかんと開けていたが、彼はすぐに戻ってきて旬果の背を大きな手で押す。

速足で廊下を抜け、地下迷宮に足を踏み入れる。

ヴィットリオは地図を開き、こっちだ、と旬果を案内した。

「どうして助けてくれるの？」

「色々事情があつてさ。何から話せば良いのかな……とにかく、まあ、俺に従った方が身のためだけ」

ここまで来たら、そうだろう。

旬果はまさかアウグストの元には戻れないし、カテリーナにも裏切りがバレたためリヴィアの元にも戻れない。

(スマホさえどうにか出来れば……でも、どうやって?)

「よっと……ここを跨いで。そう、そのコードを踏まないように。それで、一つ言えるのは、ネイサンを信じてやれよってことだ」

「……どうして？」

「あいつ、俺の妻を助けてくれたんだよ。病気になっちゃってさ、マフィアの三下の妻なんか誰だって診ないさ。そしたらあいつ、日本に良い医者があるからって紹介してくれたんだよ。妻は今ようやく快方に向かっている」

「日本……」

ネイサンは母親が日本人だと話していた。

「奥様が、大変だったのね」

「まあな。でもラッキーだよ」

地下迷宮を乗り越え、ようやく外に通じる坂を登った。

山からは深夜の明かり少ない街が見え、歩くと橋がある。  
その先の駐車場に着くとヴィットリオは旬果を助手席に乗せた。  
「どちらまで？」  
と冗談めかしてヴィットリオは言う。旬果はようやく笑顔を取り戻し、  
「なら、オテル・パラディソまで」  
と言った。  
こうして旬果は無事に元の宿泊先へたどり着き、ヴィットリオと別れるとその地下駐車場で朝まで眠ったのだった。  
それからホテル支配人と再会し、「やはり巻き込まれたんだね」とねぎらいの言葉をかけてもらう。  
そして支配人は連絡を入れ、つながった先は——  
「あら、ご用？」  
——リヴィアだった。

冷たい女の声が聞こえ、支配人も旬果も表情を凍らせた。  
「一体、どうしてかな」  
支配人はそう聞き返したが、その声は緊張で固くなっていた。  
「ああ、これ？誰のスマートフォンかしら……ふーん。レオナルド・ロッシ。警察官のものですって」  
「君は……「ローアジ・デッラ・レジーナ」の……？」  
「ご存じなの？嬉しいわ、お声からしておじいちゃまかしら。構わないわ、老人を好む子もいますわよ」  
「なぜそのスマートフォンを？」  
「ああ、拾ったの。床に落ちてて、鳴ったから」  
——リヴィアはベッドに腰かけ、レオナルドのスマホを持って通話する。  
相手が読めない。ネイサンは唇を噛んでレオナルドを見た。  
彼は汗をかきながら首を横にふる。  
「ところでおじいちゃま、もしかして「オテル・パラディソ」の方かしら」  
ネイサンは振り返った。懇意にしている老紳士。支配人？  
そうだ、レオナルドか自分に連絡を、と言ったのだ……「バニー」か「ジゼル」が来たならば、と。  
「支配人！」  
ネイサンは声を大きくして呼んだ。  
——彼の声が聞こえ、旬果と支配人は顔を見合わせる。  
様子がおかしい、とすぐに理解した。  
「ネイサンかい？」  
支配人が呼びかけると、リヴィアはビデオ通話に切り替え、彼を映し出した。  
椅子に手錠と縄で縛り上げられた彼の姿。ところどころシャツもジーンズも破け、血が滲んでいる。  
そして隣には腹部を押さえる眼鏡の男——レオナルドの姿が。  
「これは……」  
旬果は青ざめ、支配人を見上げた。彼は目つきを鋭くすると、リヴィアに声をかける。  
「一体、どうしたというんだ。これはどういうことなんだ？」  
「彼らは私のものを盗もうとしたのよ。それで罰を与えてたの。あら、そっちにも可愛い子がいるじゃない、私のバニー」  
名を呼ばれ、旬果は鳥肌を立てた。  
その時、リヴィアのスマホが鳴った。画面の向こうで彼女はそれを取る。  
「ああ、カテリーナ？どうだった？え？パソコンを？」  
リヴィアは画面を振り返り、旬果をじとつと睨みつける。  
「とんだ泥棒さんね。あなた達、お似合いだわ……」  
「どういうことなんだい？」  
支配人は旬果を見た。  
旬果はノートパソコンを取り出し、彼に見せる。  
小声で説明を始める。  
「クラネ・ジェーロの情報全てがここに」  
「それは大変だ」  
「そう、大変よ。それを私に、さっさと渡して」  
リヴィアは皺が寄るほど眉を寄せる。  
「警察に行けばあなたの画像をばら撒くわ。さあ、私にそのパソコンを渡すの」  
旬果は唇を噛んだ。彼女には渡したくない。  
だが、どうすれば？  
何もわからないままリヴィアの眼光に耐えていると、ネイサンが叫ぶように言う。  
「大使館に行け！進藤 新という20代の男に渡すんだ。それで君は日本へ帰れる！」  
「ネイサン……！」

「大丈夫だ、君はもう解放される……ぐうっ！」  
リヴィアはネイサンを銃で殴り、その銃口を突きつける。  
「良い事、世間知らずのウサギちゃん。この男がどうなっても良いの？そのパソコンさえ渡してくれるなら、この男はあなたに返してあげる。そうそう、あなたの恥ずかしい写真も一緒にね。断るなら……そうだわ、楽しい遊びを思いついた。スワッピングって知ってる？私、色々試したはずなのにそれだけはやったことないの。あなたがアウグストと楽しんだなら……」  
リヴィアはドレスのスリットからなまめかしい脚を出し、ヒールを脱ぐとつま先でネイサンの脚をなぞり始めた。  
旬果はちりっと髪が逆立つようなものを感じた。  
「好みじゃないけど、いい男なのは違いないわ。狼みたいよね、彼。孤独で、気位が高くて、ウサギを食べちゃうなんて」  
リヴィアはネイサンの後ろに回ると、そのシャツの隙間から彼の肌を撫でる。旬果とは手つきがまるで違う。  
蛇が伝うような淫らなものだった。  
旬果はぎゅっと手を握った。  
「もう切ろう」  
支配人がそう言ったが、旬果は頑として首を縦に振らない。  
怒りがこみ上げ、頭の中で火花がぱちぱち鳴るようだ。  
「あら、可愛い乳首。なめたらどうなっちゃうの？バニー、あなたは知ってるんでしょ？彼の味を……」  
「この魔女……君はもう逃げるんだ、安全な場所へ……旬果！」  
ネイサンに名前を呼ばれ、旬果はようやく自分を取り戻せた気がする。  
パソコンを抱いて立ち上がった。

支配人は日本大使館に連絡を入れてくれた。すぐに進藤 新という茶髪の青年が現れ、旬果は面食らう。  
もっと真面目そうな人物が現れると思っていたのだ。  
彼は派手なピンク色の花柄のシャツ、白のチノパンに革サンダルである。サングラスはオレンジの色付きだったのだ。  
ずいぶん早い到着だったのは、見回り中だったからとのこと。ヴィットリオと連携しており、彼の報告を受けていたのだそうだ。  
進藤は運転しながら言う。  
「いやこれ、変装っす。イタリアのマフィアに近づくためですよ」  
と進藤は言ったが、口調もやはり砕けていた。  
だが目元に愛嬌があり、旬果を元気づけようと話しているとすぐに分かった。  
「良いですか？手短かに話しますね」  
ネイサン・ブラックモア、は潜入のための偽名だという。  
「本名は安東 寧人。日本の公安警察官ですよ。ちなみに巡査部長」  
「警察官……」  
旬果は復唱した。進藤は早口で追いつくのに必死だ。  
「そうっす。というわけで、安東先輩はマフィアじゃないので安心して下さい。で、邦人が関わってる武器密輸事件と、クラネ・ジェーロが関係あるってことで潜入したんです。3年前ね。でも上官がちよっと無能っていうか、短期的な仕事は出来るけど、長期の仕事が苦手な奴で。先輩苦労したんですよ。そこにあなたが現れた」  
進藤は絵とノートパソコンの話をした。旬果がリヴィアにさらわれる原因になったことだ。ネイサンが目の色を変えて絵を追ったのはそのためである。  
考えを整理するのが精いっぱいだったが、腑に落ちる感覚と、ほっとした気持ちとで全身に体温が戻ってくる。  
「彼は、マフィアじゃないのね」  
確かめるように言うと、進藤はちらりと見て頷く。  
それを見るとほおっと息が出て、頭を下げると膝に涙が落ちた。  
「良かった……」  
「すみません。青野さんが誘拐された被害者と特定できなかったことも。なかなか先輩と連絡も出来ない状況が続いてて、孤軍奮闘だったから、青野さんへのまともなサポートも出来ず……とにかくあなたは大使館にお連れしますから」  
「え？だめ、私も一緒に行くわ」  
「何を言ってるんですか、安全なところへ」  
「リヴィアは私が店に来ると思ってる。あなたが行ったってネイサンのところへは行けないわ」  
「ええ？！」  
進藤は驚いた声を出した。  
「最上級のVIPルームよ。入れる人は限られてるの」  
「でも……」  
「迷ってる暇はある？ネイサンと情報を守らなくちゃいけないんでしょ？」  
「そうですけど……」

「部屋に入るまでは私が必要なはず」  
「うわあ……なんか先輩が惹かれるのも分かった気が」  
進藤はハンドルを巡らし、大使館とは正反対の道へ走った。  
「分かりました。でも、店に入ったら俺の指示聞いて、後はちゃんと守られて下さいね」  
「……ええ、わかった」

陽が沈み、夜の店が明かりを灯し始めていた。  
ローアジ・デッラ・レジーナも例外ではなく、赤い色を石畳に落とし、売春の城としての気配を濃く漂わせ始める。  
店の看板は電気が通い、文字が夜空に浮くようであった。  
カネを持った男たちが開店を待って並んでいた。  
用心棒は揃いの制服をきちんと着て、蝶ネクタイを整える。  
店の前に現れたのはカテリーナだ。  
彼女はグレーのスーツ、下は特注のミニスカート、ハイヒールを履いて店内に続くレッドカーペットをずかずかと歩く。  
カテリーナに誰もが道を譲ったのは、彼女がナンバー1の娼婦だからではなく、彼女の吊り上がった眉と、肩を震わせ歩くその姿からだろ。  
店の最上階、3階の奥、VIPルームに入ると彼女は小型の注射を投げ捨てた。  
「冗談じゃないわ、あのクズ女！」  
VIPルームにいた全員がカテリーナを見た。  
リヴィアはネイサンの胸から手を放し、「どうしたの？」とゆったり尋ねる。  
「バニーよ、バニー！アウグストに呼ばれて古城の会議へ参加したでしょう。その時、データを盗むためにアウグストの相手を任せたの」  
「何だと？」  
ネイサンが睨みつけた。カテリーナは一瞬気圧されたように肩を跳ねさせ、肘を曲げたが彼が拘束されていることに気づいて胸を張った。  
「そしたらこうよ。礼だ、と渡してやった麻痺剤を彼に使ったの、しかも、私にも！」  
「麻痺剤……」  
リヴィアとネイサンが先ほどの注射を同時に見た。  
「なら……」  
ネイサンはほっとしたようにつぶやき、リヴィアはネイサンを見た。  
「ネイサンには使わなかったのね」  
「そんなのどうでもいいわ。とにかく、アウグストにめちやくちゃ怒られたんだから！後輩のしつけも出来ないようなら、しばらく呼ばないって……」  
「それでデータも盗めなかったのよね」  
リヴィアは声を冷たくし、カテリーナを見た。蛇のような目つきである、カテリーナは眉を寄せて、何か言おうとしたが何も言えずに立ち尽くす。  
「カテリーナ。あなたには期待していたのに」  
リヴィアは過保護な母親のように優しく声をかけ、カテリーナの頬を撫でた。  
「ねえ、まだチャンスはあるでしょ？リヴィア、あなたの望みは叶えるわ。アウグストの膝をあなたの前で折らせる。だから……」  
「チャンス？アウグストが一度関心を失った子を二度と呼ばないって、知ってるでしょ？」  
リヴィアは爪でカテリーナの頬をつまみ、次の瞬間には強く平手打ちを食らわせた。  
「あなたの手落ちよ。バニーが注射を持っていたかどうかなんて、確認すれば良かっただけだわ。アウグストを危険な目に遭わせた、とても許さないわ」  
「でも、リヴィア……」  
「今からバニーがパソコンを持ってここに来るわ。あなたは用済みよ。せいぜい店で頑張ってるいでちょうだい、そうすれば、そのうちアウグストも許す気になるかもね」  
「アウグストなんかどうでも……」  
「彼を侮辱するなら許さないわよ」  
リヴィアの激しい怒りに、カテリーナの顔が凍り付く。  
「いくらあなたでも許さないわ。アウグストは私のものよ。彼を侮辱するのは私を侮辱するのと同じだって、わかるでしょう？」  
「でもリヴィア……ねえ、許して。さっきのことは謝るわ。ねえ、私、あなたがいないと生きていけない。リヴィア……」  
カテリーナは膝をつき、リヴィアに縋り付いた。  
「リヴィア、私の女神。ずっと私にはあなただけだったの。ねえ、金持ち男の精子を集めて、お金も稼いだ。全部あなたのためだった。ねえ、リヴィア。あなたを愛してるのに……」  
「だったら、何をすべきか、わかるでしょう」  
リヴィアの有無を言わせぬ声が響き、カテリーナはうなだれた。雨にうたれる花のようである。彼女は腕をがくがくと震わせ、壁にすがるようにして立ち上がった。

「よお、やっと来たな」  
旬果がローアジ・デッラ・レジーナに到着すると、意外な顔が出迎えた。

ヴィットリオだ。  
「シンドーも」  
「ああ。無事で何より」  
ヴィットリオは大きな手で進藤と握手をした。  
「なぜここにいるの？」  
「一仕事終わったのさ。それに、ネイサン達には妻を助けてもらったのに、あんたを見捨てたら割に合わないだろ」  
進藤は笑みを浮かべて返した。  
「充分だよ。日本行きの手ケットは受け取ったよな？」  
「ああ。しかし、見直したよバニー。アウグストからパソコンを奪い、ネイサンのためにここまで来るなんてな」  
「それは……自分でも不思議だけど……」  
力が湧いてくるのだ。怒り心頭でいっそ冴え冴えしたのかもしれない、と考えていると、ヴィットリオはにやにやして見ている。  
「これぞ愛だな、愛」  
「愛……？」  
「いずれ分かるさ」  
旬果——バニーが姿を見せると、用心棒も事情を分かっているのか、すぐに道を開けた。  
進藤とヴィットリオは客のふりをして入ることになっている。  
旬果は迎えにやってきたバーテンダーに案内され、二人を待つことなくVIPルームに連れてこられた。  
心臓は早鐘のようになるが、もう引き返せない。引き返すつもりもない。  
重々しい銀細工の取っ手が引かれ、ガチャリと音を立ててドアが開かれた。  
中にはリヴィア、カテリーナと、見慣れぬ眼鏡の男が倒れており、そして椅子に左手を手錠で、右手と体を縄で縛りつけられたネイサンだ。  
「……ネイサン……」  
「ジゼル……」  
ネイサンの声は落ち着いていて、旬果はぐっと力を取り戻す。  
「それを置いて、逃げるんだ」  
ネイサンはそう言ったが、旬果は頷かなかった。  
「写真が……」  
「そうよ、よく覚えていたわ、バニー。あなたの写真があるものね」  
「今すぐ消して。そうしたら、渡すわ」  
——俺達が間に合うように、出来るだけ時間を稼いでください。  
耳につけた小さなイヤホン越しに進藤はそう言った。旬果はパソコンを強く抱きしめ、一歩前に出る。  
「やっぱり自分が大事よね、バニー。ネイサンの為じゃないんでしょう？だったら話が早いわ。そのパソコンを渡して、さっさとお逃げなさいよ」  
「嫌です」  
「フフン、図太くなつたわね。要求は何？」  
「ネイサンを殴らせて」  
室内の空気が止まった気がした。  
全員の視線が旬果を見る。  
「……フフッ……アハハハハハ！」  
リヴィアの高笑いがVIPルームに響き渡った。  
「良いわよ、好きにしたら？でも、その前にやらなくちゃいけないことがあるわ」  
リヴィアは旬果に服を脱ぐよう命じた。  
旬果は大人しく従い、ワンピースを脱いで下着だけになる。白いレースの上下、すっかり着慣れた「バック」。  
「危険なウサギちゃんだこと。どこに麻痺剤を隠し持ったの？」  
「ブラの中よ」  
「パッドを入れる部分ってわけね、確かに分かりにくいわ。賢いこと」  
まさに一糸まとわずだ、旬果を見ると、リヴィアはカテリーナに服を確認させ、彼女が頷くと「いいわ」と言った。  
旬果はパソコンを持ったまま、椅子の上のネイサンに跨った。  
正体を知った上で見つめると、しくしく胸の奥が痛み、同時に愛おしさが湧き上がってきた。  
3年。  
3年間、彼は孤独に耐えたのだ。  
「ジゼル」  
「ネイサン……」  
「君の望む通りに」  
彼の頬を撫でる。唇を指先でなぞると、ネイサンは魅入られたように見つめて来た。  
「殴るんじゃないの？」  
リヴィアの嘲笑が浴びせられるが、旬果は構わずに彼に口づけた。

彼を抱きしめながら角度を深め、こっそりパソコンの「隙間」を作る。  
それは眼鏡の男の近くに落ち、目配せすると彼は小さく頷いた。  
「良いものを見せてもらったわ、パニー。あなたのストリップは潔くていいわね。さあ、写真を消してあげる。ご覧なさい」  
リヴィアは一枚一枚、削除し始めた。  
話が早すぎる。リヴィアがこんなに簡単に言うことを聞くだろうか？  
「全部消して」  
「分かってるわ」  
写真の数も、映像の数も多い。それが幸いだった。  
眼鏡の男——レオナルドは旬果が渡した小さなカミソリでネイサンの体を縛る縄を切り始める。  
その音でばれないよう、旬果は髪をかきあげ、わざとらしくネイサンの唇に吸い付いた。  
「はあ……もう、ずっと待ってた、ネイサン……もっとキスしよう？」  
「ジゼル？一体……むうっ」  
レオナルドが親指を立て頷く。あともう少しのようだ。  
ちゅう、ちゅっと唾液を絡めて吸い、縄がほとんど切れたのを見ると口を離し、彼の頬を引叩いた。  
これでネイサンが力を入れれば縄は切れるだろう。  
次は手を解放しなければならぬ、死角を作る為、旬果はネイサンの上に横に座り直す。  
レオナルドがその背に隠れながら作業を続け、手錠が小さな音を立てさすがにネイサンも気づいたようだ。  
「痛いな、ジゼル」  
彼は手錠が外れる音をごまかすため、やや大きく声を出した。  
「調子に乗ってその名前では呼ばないで。パソコンの代わりにあなたをもらうつもりだから、これからはご主人様と呼ぶのよ」  
「冗談じゃない、あんなに激しく愛し合っただろ？ジゼル」  
「可愛げのないペットだわ。ちゃんとしつけないとだめみたい」  
彼のシャツを開き、胸を撫でる。  
旬果は軽く唇を尖らせた。  
「他の女性に触らせちゃだめ」  
「なら満足させてくれよ、”ご主人様”」  
その時、レオナルドが親指を立てた。  
旬果は髪をかきあげ、小さな骨伝導イヤホンをつまむとネイサンの耳にそれをひっかける。  
「ノートパソコンを渡します」  
と小声で言うと、とんとん、とノック音が聞こえた。OKのサインだ。  
「さあマダム……」  
立ち上がってワンピースを着ると、リヴィアに向き直す。  
「ネイサンをくれるなら、ノートパソコンをお渡しするわ」  
「構わないわよ。さあ」  
リヴィアが口角を持ち上げ、舌を出す毒蛇のように笑った。  
その手にそっとパソコンを差し出す——その時。  
「確保！」  
という威勢のいい一言と共に、ドアから窓から武装した男たちが現れる。  
リヴィアはとっさに銃を構えたが、ネイサンは縄をやぶりそれを蹴り飛ばした。  
「嘘よ、なんで警察が？」  
リヴィアは両手をあげて壁に立った。  
「警察にいた裏切者なら始末済みだぜ」  
ヴィットリオだ。  
「俺を誰だと思ってるんだよ、掃除屋の息子で……」  
「組織を裏切ったってわけね」  
目も顔も真っ赤にし、リヴィアは旬果を睨みつけた。  
「なんて厄介な……この疫病神！」  
「お前自ら自分の欲に負けただけだ」  
ネイサンが旬果を背に庇おうと手を伸ばした瞬間、パン、と軽い音がし、全員が腰をかがめた。  
「逃げて、リヴィア！」  
カテリーナが叫びながら銃を構えた。銃口がはっきりとこちらを向くのを見つけた。  
迷うことなく引金に指がかけられ、ハッと息を飲んだ次の瞬間、ネイサンが自分の前に立っていた。  
「先輩！」  
「ネイサン！」  
リヴィアが捕らえられ、カテリーナがその場に押し倒される。  
「ネイサン……」  
血が出ている。

「大丈夫だ、ジゼル」

ネイサンが旬果の膝に倒れ込む。

一瞬の間に目まぐるしく状況は変わり、旬果は手に感じる血の温かさに震えるばかりだった。

【クラネ・ジェーロの犯罪が次々露わに。アジトであったロッカ・ディ・ルチェは爆破、その中から幹部と思しき数名の遺体と、カポ・アウグストと思しき男の遺体を発見。どうやら内輪もめの末銃撃戦となった模様、のちに発破か。クラネ・ジェーロの幹部である元モデルのリヴィアは逮捕された。真実が分かり次第、追って報告……】

病院を訪れると、進藤達がネイサンの病室に詰め掛けていた。

事件の報告書をまとめているらしい。

こうなっては完全に蚊帳の外である。

旬果は一人喫茶スペースに入り、コーヒーを待って外を見ていた。

今日もパトカーが走り回り、街に残ったクラネ・ジェーロの者を探している。

街は少しずつ活気を取り戻し、以前よりも堂々と外を歩く人が増えた気がする。

雲の間から日が差し込み、道路を輝かせた。

「隣に座っても？」

そう声がかかり、どうぞと言いながら振り返る――

「ネイサン……じゃなくて……」

「ネイサンで良い。君は……」

「……」

旬果は視線を落とした。病院への用は彼の見舞いだが、よく考えたら何をどう話せば良いのだろう。

「俺の事は忘れるように」

ネイサンの声が静かに響いた。

「え？」

突然の言葉に、旬果は戸惑いながらネイサンを見つめた。

彼の目には決意が宿っていて、まっすぐにこちらを見つめる瞳が彼の本心を物語っているようだった。

「異常事態だった。君は混乱してたはずだ。俺への態度も……」

「……そう、かも、しれないけど……」

旬果は視線を落とし、手元を見つめた。心の中で何かが崩れる音がした。

(忘れる？ネイサンを？)

あの日々の中で、唯一旬果を守ってくれた温もりを？

ネイサンはじっくり間をおいて、旬果を見つめると言った。

「悪かった。君のことをちゃんと知ってから一緒にいるべきだったのに」

「出来なかったんでしょう？」

警察に裏切者があり、旬果自身も何も言わなかった。

「それはそうだが、言い訳だ」

ネイサンは前を見るとコーヒーを口に含む。

「……忘れたくないのに」

「……」

「あなたに関係を迫ったのは私だから……」

「生きるためだ」

「そのためにあなたを利用したの」

「ジゼル。君を本当の娼婦にしたのは俺だ。俺を訴えても良い。それが必要なら、俺を憎めばいい。だが自分を責めるなよ。利用したというなら、絵を探すために君を使った俺の方が罪は重い」

「でも……それはしたくない。ネイサン……」

このままネイサンの腕の中に飛び込みたい気持ちになったが、それをこらえるように手を組む。

「どうして私を抱いたの？どうして優しくしてくれたの？」

まるで恋人のようだった。

思い出すと胸が熱く溶けそうになるくらい、激しい思い出になっている。

「それは……」

「私が迫ったから？輪姦の相手にさせられるのが可哀そうだったから？」

ネイサンはゆっくりと首を横にふった。

答えを待つと、ネイサンは前を見て、意を決したように旬果と向き合った。

「……一目ぼれしたんだ。君に」

「え……」

「他の男に触らせたくなかった」

顔に熱が登り、旬果は目元をこすった。涙があふれ、指を濡らす。

「なら、このまま好きでいても……」

ネイサンを振り返ると、彼は目をそらさないまま「ダメだ」と言った。



「どうして……」  
「異常な事態で、正常な判断が出来ていないかもしれない。俺のことも混乱したまま見ているんだ。だから、事件と一緒に、俺のこともただの過去にした方が良い」  
「あなたはそうするの？」  
「しない」  
「そんなの……」  
「ずるいか？でも……君には君の人生がある。それを棒に振っていいわけではない。もう解放されて良いんだ。自分の人生に戻れ」  
「あなたは私のことを……」  
どう思ってる？  
そう訊けば、どんな答えが返ってくるのか。旬果は聞くのが怖くなった。  
もしたただの同情だったとしたら？  
ただの娼婦と客だったとしたら？  
だがネイサンの口から出たのは、それではなかった。  
「逢う度、君を愛おしく思った」  
ネイサンの言葉が静かに落ちた瞬間、旬果の心は大きく波打った。目の前がぼやけ、彼の顔が涙で滲む。  
胸の奥でじわりと熱いものが溶け出し、全身を駆け巡った。  
「……」  
言葉を失った旬果は、ただ彼を見つめることしかできなかった。  
ネイサンは立ち上がった。そのまま踵が返される。  
このまま別れてしまえば、どうなる？  
わがままだとしても、何もせずに諦めることだけはしたくなかった。  
旬果は立ち上がった。  
「半年……半年後……また逢えない？」  
口からそんな言葉で突いて出た。  
ネイサンが振り返る。  
「ちゃんとリハビリする。だから、半年後、その時、あなたへの思いも分かってるはず」  
ネイサンはまっすぐに旬果を見つめると、確かに頷いた。

約束は半年後、日本のハイツリーで。

果たされるか分からない口約束。  
旬果はようやく帰国し、ネイサンに紹介された脳科学の専門家と会った。  
リハビリをしながら職場に復帰し、展示会を手伝う日々に戻っていった。  
トラウマがないかのチェックが入り、睡眠薬は徐々に使われなくなっている。  
あのイタリアでの日々がただの夢だったのではないかと思うほど、日常へ戻っていく。  
少しだけ髪も伸び、季節も冬へ変わっていった。  
約束の日がやってくるその前の夜、旬果は夢を見た。  
シルバーアロワナが旬果の周りをゆったり泳ぎ、海水をかきまぜて綺麗にすると、去って行ってしまおうという夢だった。  
ばしゃばしゃと水を打つ音が聞こえた気がして目が覚める。  
「……」  
額を軽く押さえて部屋を見渡し、ここが日本だと再認識する。  
仕事を終えてハイツリーに向かった。  
専門家は「問題ないですよ」と太鼓判を押してくれている。  
あとはネイサンが来るかどうかだ。  
律儀な彼の事だ、きっと来るだろう。  
5時になり、6時になり、7時になった。  
展望スペースは客の層を変え、旬果は一人で立ち尽くしている。  
「もうすぐ8時……」  
とつぶやく。  
声はすぐに吸い込まれて消えた。  
その時、アナウンスが鳴り響く。  
「誠に申し訳ございません。本日夜9時頃から強風のため、展望スペースを閉鎖とさせていただきます……」  
残念そうな声とともに客がエレベーターに向かっていった。  
旬果も一人、エレベーターに向かう。  
こんなものだろうか？  
日常に戻り、ネイサンとの日々も全て過去のもの。  
リグーリア海岸で過ごしたあの日々も。  
過去に戻りたいわけではなく、もう一度ネイサンに逢って、確かめたかったのだ。  
(そこに愛は、あった？)  
それだけを。

エレベーターが開き、人びとが外に流れ出る。  
旬果が顔をあげて歩き出したその時、何度も何度も見入っては夢中になって追い求めた、アンバーの目がそこにあった。  
「君は誰だ？」  
少しだけ冗談を含ませた声は、体の奥に染み付いた記憶と同じ。  
低く、深く染みるような響きを帯びたもの。

「……私は……」

本当の名前を口に出すと、温かい涙が頬を伝って落ちていった。

終わり。